

塵点録

五十八

049
ア3
58



愛知縣史系  
源氏物語伏見の塵

品目  
場  
愛知縣  
書課

源氏物語伏見の塵

世々の先達も各各おのりけりて其心とて  
りしと中院通村けりしにゆきけりしと  
おまはこそおのりけり相臺いりしと  
して五合の一会をとりて其心とて  
りしと中院通村けりしにゆきけりしと  
世とまらりしと中院通村けりしにゆきけりしと  
一合の百為多くは同公且承りしと

愛知縣史系  
33.7.30  
40311

A04  
73  
58

A049  
73  
58

その名ハ幽玄より出て侍色ハかくいふ也一ニかきと  
かく名をいふも縁とありて更ニ相違の  
みことと云ふ且ハはるかにいふなり

藤人系の尊号もいふこといふ主尊<sup>主尊</sup>可侍りて且  
てつとていふとにぬ天皇の侍守よりと藤人の終  
とありて藤人の長六位の藤人はいふ侍るは  
かくての親王二世二世の源氏元服ハ藤人院  
よりいふはありて侍るといふも藤人の君に  
ハ侍るといふことニ系為右為兼といふあり

い侍りるもや三系實際ハ抄ハありけりい  
と「いふこといふこといふこといふことい  
ははの文の源氏提要抄と藤人院ハ侍るは  
たハ例ハ越すと物色ハありいといふことい  
元服ハいふこといふこといふこといふこと  
書ハいふこといふこといふこといふこと

ちくまの巻物侍ることいふこといふこと  
いふこといふこといふこといふこと  
不<sup>不</sup>いふこといふこといふこといふこと

中ねし回しととんひ又きるのくぬねのきあひも  
中ねふすそのあつてさしふととんひもぬねも  
つふゆりもささのほろしめ侍りたり又  
右近の父もささの是の回名矣人あつても明なり  
なりやこもさのしと流りぬゆり又信る樂なり  
もすねたふさると多し寛文三年卯月のこと  
故郷卯花とささのささのゆり

ゆりまのささのささのささのささのささの  
かきよとりのにささの井雅章為丸賢彦といふて

名の中ねのささのささのささのささのささの  
心ねもすてに物徳の上ささの侍りたりあつて  
たささのささのささの直隠 秘伝かと水原はささ  
かきよとこの字とあつてゆりも又に文字の  
ささのぬねの直休ヒタヤゴモリあつてささの上のささの  
れ休書しそねのささのゆりもささのゆりも物徳の  
心あもかきよのささのささのささのささのささの  
てささのささのささの

揚谷の舟のことといふささのささのささのささの

きしうぬやーゆひひりりるを通村かかいらいあ  
てらんふーさーさーさーさーさーさーさーさーさーさーさー  
とらんあーてぬよめさうひあて四方三方の官か揚  
名の官りり又い百官さう揚名の官わりの折政冥白  
大臣納言も亦揚名わりの其所職とさふひさきにわ  
つーつーのど揚名といふさーと秘ささあわひふの  
物徳の揚名のなさうさーのささうさーとふと秘さーと  
さぬとゆわ又いさーいさーいさーいさーいさーいさーい  
橙のなさうさー其國わりのさーと橙いさ京さう

公達殿とのかのかさうさーさーさーの守女と兼帯  
りるハ三々毎ニ院の召ぬ許さうさーの國わりの  
ささうさーさーさーとそれを傳授とささうさー  
ハさの橙のなさうさーの國さうさーの作らぬたさのなさ  
りさうさーりてがさうりて橙のなさうさーと秘さ  
らさうさーりさうさー揚名の名と傳授とす  
ぬいさうさーさーさーさーさーさーさーさーさー  
さーのさうさーさーさーさーさー  
さーさーさーさーさーさーさーさーさーさー





延宝元年十二月下旬

池尻左京勝房

私云本書甚塗抹文字不分明者多  
矣大槩雖正馬有猶不可及推量者  
後哲正馬

宝永五年仲夏寫之

朱書良興筆

源氏物語

五十四帖

○卷之三名ヲ付毛詩正義名篇之例不過五此例ヲトシ  
○河海抄等ノ序ニ光源氏物語左寛弘乃始母出きて  
○藤院の末母ひろよを述り

○順徳院御記ト云源氏物語不可説の由之文字凡人の  
の不知るありと云

○水鏡云

中山内府忠親公作

案式アウ源氏物語傳り

として傳るハ文字凡夫の不知るハ竟傳る

○俊成の六百毒奇合判詞ニ云源氏物語と云ん  
たよりをそとの事と云

○定家云案式ア方よりその程よりを抄く案式  
ハ物語と云んをたのみ面白く方よりく物語と云ん



○一条院寛弘万歳と云ふ百年をくりこれとも其母せりてあそぶと云條三位俊成系御孫つ定家の法ありと云

三 明同之

○物後准拠と 時代 醍醐 六十代 朱雀 六十一代 村上の三代 准

よもよも 相奪あつた延喜朱在ハ天受冷泉ハ天曆  
光原氏を西文尾大居 ち代おあスル之 河孟明

○抄云凡御終のるしひそり法と撰ゆると一撰るしん

光と云名を仁明の御子西三條太大臣源光 男男母

つゆく光と稱ゆると云廣懐太大臣源光の子息光

光抄ハ天下才一の英男まつて光抄と名づく是と稱ゆられ

○明 源光法乃兼依の人之凡此仁母撰ゆると

○抄 法藝法乃母や新と云は色近大信三ノト云ノ面影ヲ

と撰ゆ 源氏た近のいと云明子の例之 近在才一の子 号西宮左大臣

は公後詔キミ乃そ二事びさく之ひし人云明云云源氏

前母源の姓と云源氏の思もくのと云又云明云の母ハ

更衣周子 左大臣源唱女 文衣撰も相似たり

源子の浦母満居のりハ行年中袖云母云ひよりたり

満居の付風ぬの変ありて云くさく子周子且の

東征のりよは比云く之又芳垂相於掌府天も行の

いと云源氏も童主又信云云之類のりお似たり

ゆ云のいと云中ねの風と字あり則二条后母准して

為云云女院号若舞 二條当侍 臈月夜 密色のりと云

明 帝王四代年七十餘年の真奈と云眼影母

又云ねがごとく云々あり

或抄云 秘名院正統之 抄云あひ荘子富言と撰して作

物終るといども一皮とて先蹤本説るる事とのせはと云

○明 ころばく文新と似たり知ハ史記の筆法と云り

卷の母法と云ふ事と史記の面影と接ハ

○言明公冷泉院安永二年に大宰師をた遣せし是れ

一リハ若武ア幼むりりる也と云まらりてと云ひ歎キ

多於此る也ハ光源氏と左大臣比ハ一筆上と武

部ハ吾力ありてへて書りとは 明河

○ハ物終の大綱若子ク寓言ありと云たり

○三山院 一字麿殿ハ春秋の法之修之の麿殿ハ

通經の文勢司馬光ク詞と字ぶと云云 抄是ハ

若子ク地と云何事とも批判したると云と云り云

一字のをてふと云の一字ハ麿殿ありと云り

○は系式アハ清堂園白毒也相繼々上东门院母陪侍

之執終焉云云祖良門よりみ代御系古友原為付ノ女

母を接はち為信ノ女梁子武ア母ハ斎門依宣孝母

嫁して大武三位弁局杖衣作者と生ム

○河海ニ武ア墓ありと云林院白毫院の南あり

或ハ之郡院賜傍守の許可と云ありて云台一云

親の血脉母の是り

○明 順徳院御記云武アを日本記と云く一見たり

是と修する所ハ案の内侍ハ倫言と云く日本紀の

由ケルと号せり云云案ノ日記ハ是と載り

○ハ物終 延喜と云ふ事書出ると云深の事ニ代

実録の法と續と云司馬光を體ニ春秋ヲ續同と云云

小此塵

然り

其也

式部

鳴り

通長

甲

口

北

千

千

四

乳と接は  
師を凡て延せしむる  
てまらうてとひ終  
如比しは案上と式

明河

いと流たり

法之修々の慶長  
あぶと云 抄是  
たさともをとりふや  
家殿あまらわう

く上东门院母陪侍  
系古友原為付女  
お奮門依宣孝母  
と生

院の南母あり  
あうて天台一ふ三

言とあうて日記の  
なと裁り 毎  
とと深の菊三代  
春秋ヲ續同と云

此慶長録とて世伝は乃隨予り

然りて武部が病を勿りまらふは

式部と東の院に陪侍し後意存

道長公のけりて武部のまら

此意を七論ある武部乃博孝り

予慮りて也

四倍の年此後沙丁洋田良記



○ 咲 雲がくれとい人の遊と云と万葉集の證あり  
 ○ 季子云 海抄に法本抄ありと云々  
 ○ 河内本 抄 河内寺源光行布之明以八平校合取捨為  
 形本云云 老行ハ法本十代ノ苗裔ハ河内也  
 抄是也ハ河内云々古詞と云へ或ハ詞と割リ義理多  
 付キ多程ニ或流多ク由來テ作者ノ中云といハチグも云  
 ○ 善表紙 明 善表紙抄云定表紙云云  
 明ハ始終ノ多ハ史觀ノ善法と云々して同詞と云テ  
 善ク強クと云知テ善生ノ不ハ母書生ノ強也一と  
 稱して之善と如ハ也一改ハ来リたり云々母云本  
 抄是也の云ありて始終ノ中云と失下リ言ハ定表紙  
 善表紙の云本云して此善の云云と云下リを可守

ハ方云云云

○ 堀川氏大后俊房本 号善表紙

源氏法抄

源氏真入 伊行作 行成ノ抄也 定表紙追加抄法本真入  
 号云云

追注加 定表作 善表 真入ニ善ヲ添フリ

水原抄 河内寺老行作 河内本注

紫明抄 老行子或ハ史觀ハ紫雲寺素寂作河内本注

源中最秘抄 同人作 源氏中ノ秘説也

源氏論義 弘安年中論源氏始終語云々

河海抄 明徳院青之世孫四辻ノ大后善成之の作也  
 一説ニ号ハ松岩寺ノ大府ノ法名常勝

明 是水系のよりしき不と珍くても之故事再歴と行録  
多記と述くは是当河内平母をきなり

花鳥餘情 九卷 兼良公作号法成恩寺 有西本

此河海の誤とてして多記と演説は是も於青衣紙と  
おまの多ありこれバ多長紙久只真入一抄の各  
とちのよりこれども河海花鳥の多説くはく  
抄終の東西とてしはふべきやむお家の抄

源終秘訣 一冊 源氏の内十五ヶ條の抄説有 同作

和栞抄 一冊 同作

年立 一卷 同作

是之ハ皆河内平と用て多長紙と用くもさなり  
西三条内府実隆云号道遠院二条家の多あり  
真云多ひて宗紙とつ候合あり多長紙と用ひ  
まがりこのよせと皆は流母く多長紙と用ひなり

不審抄出 一卷 宗紙作 河花の多抄の外不審の多  
どりと兼ふ云へ初中これ同各之

帚木別註 一卷 同作

時花抄 八卷 抄肖拍老人書道遠院調文  
久齋庶流牡丹花老人号多長紙

細流 七卷 西三条公條公之作 号称名院

師鏡 是弄花とりして不定と補ひ河海花  
名の誤と下してそ可和と取用ひ終て花鏡不始河  
後う花或ハ抄よ垂るど名可終なり云

明星抄 七卷 西三条実澄云之作 号三光院

師鏡 細流并茶寫一冊と加へく初と母小補有

孟津抄 廿二卷 九条禅閣植通公之作 号茶光院秋山公

多屋云ワ外祖文道遠院及の源氏抄終はあり称名院

及母母向と柗女之先院殿より穿入鑿一度く母及びと云  
る案母は五津抄ハ海峯宮室紙少程味花あど用ひ成を  
要として畧しく志願し柗女之の系と云は後と加ふる但志  
本柗家のあやまり不あしく不意のことども多しうりてそ  
以後と用ふるとの十又之四また不悟也

凡例三季云平定子箕初如菴 八条宮より仕よけぬ終の  
儀徳と支十五ヶの柗訣ニヶのに傳あを後傳り又先  
傳鳥座又桐葉一巻の儀人ともて口傳あ年支し傳  
しは如菴老人ハりし柗右院ハ三先院ハりりお傳て  
八条の之の由系もも海ざらちこれ傳しとも云は  
傳人ハ細流と云てりしとてこれ傳し又鳥座を九条の  
東先院のさみよ志とていぬ終の身系を柗りて  
伝九条ノ大岡寺家ニの由系ももおと云は母母志しは  
伝しこれハ是ハ柗女五津抄とさみちこれしよりて

は抄し細流五津のあ抄とりしと ○柗統と紀と  
とのと皆如菴老人の祝之ぬ心居士の祝と干二のこ又  
とこれと之先院のの祝のうし傳統傳し ○右ノ柗抄  
の柗女柗統と云口訣と云不定取之但し柗家のの柗訣  
ニヶの大小等と各別のとるは柗

六条院 母桐葉更衣柗察大柗言女 父桐葉帝

桐葉出と生し之年とる祭と同年秋母の息不とおられた  
母とのおえしの方にとりて常事其の事ニを傳中ね十三  
紅糸の髪を母正三位中ねぬえ 日巻と宰相中ねぬえ  
葵をよを傳大柗 柗葉子内傳のりんの君のの事へ  
と廿四次子の事との三月母柗列次子の傳へおひしと  
すよサ又たののの三月母柗子玉明との傳へる傳らひ  
たよ又ののの秋山門の由着よとるくり外と長と程

ろく平位みあり移の卯の太内云々又改称サセ澧漂巻り  
内太内は改称共為多きの事大政大臣に任じし源氏  
因く辞し之秋牛車とゆふく多中を出入り亦幕  
乙女の事ふ太政大臣日書に忠仁公の例あり准三后の  
宣多ととりて亦二帝の護持傍の中さくをせりしと  
と思食く移めりしその事には下の礼と改めく事  
太上天皇の尊位あるごとくして院あり西封給りるふ  
言條院と中一系考ニホ六と云光ウラもあふり白  
去部字の事々に及りたり光君と云ふ人につけ奉りしと能

桐葉

○ゆぐみを お前云とりのと分てりたり

○馬道 孫の馬道 三馬道

○後凉殿 うらうでんと漬一うるまのとのと字のく

○助及万 ねとるびたるとり

○み六日 細 世依ニ海でけるといふを之河

○墮蹴史記

○つひみの之はとゆぐりて ぼとねらとらあり

○うろくことあた ありしとをふゆてもるごとと云曆  
ありしとを中平の白といり河

○心操平 日本記 ○めやうく あり

○弘徽殿 河 親統共こととらあり











○わが故しと ころころと 〇やまゝ 移るると 忍やかに

○懐哉 慨哉 目 源氏十巻カ計畧ニテ空蟬宿不ニ入ル

空蟬宿衣ヲ脱テ去ル源氏撰テ伊予旅 朝端ノ蔭ニ通ス

○あらし次 孟 圍基ノ結ナリ 又 關 結ハるは 關ガあると

○祝其私屏 孟 垣石尺 日本記 関万

○今度 日 ありと 〇いふ 答ルと

○来ぐ 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

夕顔

源氏十巻年分十月と 夕顔ノ息女ト思ヒアリト云キ 袖テ見立是茶坊保明親王ノ少方 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

○夕顔み位 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

○このとくにも 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

○文目河 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

○むらさきの 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

○楊名 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

○且閑容 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

○わが故しと 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

○そらう 〇あむりし 〇あむりし 〇あむりし

○ さいしうぎの 子んうとらめくらり

○ 中世文石大内実質ると賢人右府と移せし人をもと好文のなみ礼る 聖書の一巻と人リしとす

○ 凡は物終ふ名字とこしとてとと 惟光 ヨシキヨ 良清 ヨシキヨ 入るり

○ 八月十五夜 細法陽交令とよむ思とつり

○ 家業 民業 稔農 乐作 稼福 農桑 田宅 穡 田をけのつらうり

○ 二海 三光院兵 二海 三光院兵 二海 三光院兵 二海 三光院兵

○ いとおのころふ ちやうく

○ 秋のわらわら 秋のわらわら 思ふと

○ 海 海 海 海 海 海 海 海

○ 事 事 事 事 事 事 事 事

○ 不意 細 卒 卒 たりたり 思ひたり

○ いとあいごころり 細あはるる

○ 細河海は病者の世とてん相と死相のり

○ ゆづい 三法 といふごとく ころなしてひあやうしと

承和してよみよ声之文送平六部漏刻銘が史記誰何火行  
平和文粹ニモ見ユ

○ そよ 細 細 細 細 細 細

○ 長押 ナゲシ とえのり 長押 とえのり

○ 細人 丹 鯉 鮠 くらげ 魂 たりつて 世は 世は 世は

○ よりとる よりとる ととる

○ あてり あてり あてり ちえ ちえ ちえ

○ くり くり 細 細 細 細 細 細

○ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ ころ

しと老嫗ノ神とより一統編を成りて之痛とく入タルカ

○いとぞれる ○旅人

○清息 文の神と云

○いとぞれる ○旅人

○孟世の中乃うさびにたもと柳を深き谷にたわさるる

○うらみあふる 細いあふる ○退る夜

○十七日の月 ○物ひらうしき

○うらみあふる 細いあふる

○孟に葬送は茶ニハ言念併切十五切徳之由見カク聖教ニ

○大徳 法師のまこと切のありと云

○放塚ゆきさ とうらにちまうるまの

○とこりそそりて 病平徳之 茶のたよりさぬとりのり

○しり ばねと云

○孟 思やそいし人もみられざらんあうひてぞんね

○孟 孟の誦之をんそそめやんをねぬにやと云

○とそぐび 省畧セ又ナリ 白按事殺 ○文章博士

○四十九日 細いほくまも判母む

○涼しさいの松糸ゆきもさるる麻の風を忘る孟

○ゆきをぬき 心方字清濁を

○ゆき 幣之 孟被麻罽中ニテ八道祖神ニ午向ル是ヲ旅人ノ道ニ

○源氏乃御別室蜂の極麻ノき云 櫛を柳の屏りと篇と云

○ゆき 源氏乃御別室蜂の極麻ノき云 櫛を柳の屏りと篇と云

送るると忌とのもは源氏には空蝶の交會ありては  
又梅に三津院に子別のつ掃く一多ひも人帝教と願  
くもさといひあるとおれぬや

若菜 源氏十七卷の三月よりその夏と云んぬ

○源氏 癩病 疔 ○罪

○あつらひしけり 疔 孟 あつらひしけり

○あつらひしけり 疔 孟 あつらひしけり

○あつらひしけり 疔 孟 あつらひしけり

○あつらひしけり 疔 孟 あつらひしけり

○あつらひしけり 疔 孟 あつらひしけり

○あつらひしけり 疔 孟 あつらひしけり

○あつらひしけり 疔 孟 あつらひしけり

○あつらひしけり 疔 孟 あつらひしけり

○頬面様 勞亮 日本記 けけくとしたる也

○孟 弟 孟とあつらひしけり 孟とあつらひしけり

○初夜 ○あつらひしけり 孟とあつらひしけり

○凡 け 凡 終 孟とあつらひしけり 孟とあつらひしけり

○あつらひしけり 孟とあつらひしけり 孟とあつらひしけり

○阿闍梨 ○あつらひしけり 孟とあつらひしけり

○あつらひしけり 孟とあつらひしけり 孟とあつらひしけり

○一族 孟とあつらひしけり 孟とあつらひしけり

○あつらひしけり 孟とあつらひしけり 孟とあつらひしけり

○あつらひしけり 孟とあつらひしけり 孟とあつらひしけり

○あつらひしけり 孟とあつらひしけり 孟とあつらひしけり

あつらひしけり 孟とあつらひしけり 孟とあつらひしけり







○<sup>イロ</sup>くろくろ色 紅梅のこころをさくさくとおめりけり又お梅は  
みもこのあまのいほ也果るるまはくは原と云ふ果也

○<sup>シ</sup>や 光ノ字之

○<sup>キノウ</sup>くろくろの色りしと 細かやいさあまのいほ酒より孟婆の  
色しと又うげやれたなり

○<sup>エ</sup>蒲萄そのわのとりとりのいそ 紫色最上も清し

○<sup>ヒ</sup>日ノ脚やとくさくさく

○<sup>シ</sup>踏奇 宣命繕ふた歌りしと又あられまじりしとあり

○<sup>シ</sup>おやろけりしと ちかやうと云ふかの字

○<sup>シ</sup>あくらんいそをしあくらしとあくらし似の字アハナト清し

○<sup>シ</sup>知多子賀 源氏十七年方ヨリ 十八年の七月とあり

○<sup>シ</sup>足ゆく顔持

○<sup>シ</sup>清賀と云は誠樂 調樂なりと云は舞樂のいんごも云は花

○<sup>シ</sup>垣代 警固也垣ニまきけ内え装束と忌むと云 清 万系

○<sup>シ</sup>こころなきて ちかやうと云ふかの字

○<sup>シ</sup>二月の十日餘り若氣産 清子 換冷泉院と云は源氏をうて胎ルエハ  
貞基源氏ニ似たり十一月ニ生

○<sup>シ</sup>呪咀 のろゆ之ウケヒトヨム 拍子

○<sup>シ</sup>殺あ

○<sup>シ</sup>羅睺羅六年耶喩陀羅女子腹ニアリ

○<sup>シ</sup>大袈 ちかやうと云ふかの字 ちかやうと云ふかの字

○<sup>シ</sup>自由 ちかやうと云ふかの字 ちかやうと云ふかの字

○<sup>シ</sup>保房 保房保房保房 保房保房保房 保房保房保房 保房保房保房

保房保房保房 保房保房保房 保房保房保房

○<sup>シ</sup>采女 女苑人 天子の側をくわしつらき女也

○<sup>シ</sup>夏の山源氏源内侍 ちかやうと云ふかの字

○<sup>シ</sup>蝙蝠 ちかやうと云ふかの字 ちかやうと云ふかの字

ちかやうと云ふかの字



○ ちねのうりの路もよまは 花は皮す一の就る法也（つた）

○ 二後の綱アハくしくまは 呼口侍は之け物修の富子の祈（かた）

○ 馬をどりやうの女（なま）

受帳の月もあつりつる也

○ つや衣裳 孟律 衣つながら 昨オク物石中袖のよあめ

つらとあつてあよらふこと 孟使の流に云市女等とうり

○ 四月新院ニ度 河櫻ニ控船足ヲ深代ニ動ク物ト見テ已（い）

○ 生霊呼 窮鬼 遊仙窟（いん）

○ りりほしめ 梅りて名を けくすのそら（け）

○ 験者（げん）

○ 袖のり 衣物とて何れを ありる けりてのさのさげ（さ）

六条 下のおはゆ終才一の等と云云 細

○ 猛幸（まげ） いりき神（しん）

○ 思ハドと 物と 物と 思ハドと 思ハドと 思ハドと

○ 物件有えの 中宮ハ 嵯塚の 五果川め 五果の 神院の 中（な）

と紫地にも

○ 葵上生ニ 夕旁 先ハ 四月 新院ニ 交フ 祇ニ 深代ハ 和使 参儀言

休年スナサニ息不尺由ニ物 葵上と事ウ争フを懐リ後生ニ毒

と以テ胎希 葵上ヲ懐スナニ息モ亦自悩 産後八月廿余日

葵上依ニ死ス年廿又深代ヨリあり物ニケニト云ニ怒ラシ

○ 擗（な） ○ 邪子の 護摩 丹ハ 芥子 と（つ）

○ 水ゆゑら まつり 細 髻 洗 史記 沐 （サエモ）

○ うたえ 少ハ 何といふこと（さ）

○ 動御者 日 初ま こそ（つ）

○ 枕と 習志を 蘇生 七次と 云成之 死人 五 枕と 云 細

○みづめらひぞ 三月奉妻ノ服ノ色ナリクテ爲キニ輕服ナリ

○菊のりし紀もわら細 未開ヲ云 咲けりしは折らば

○三日 三ツ日 四十九のときと云 〇さこののりさうわるとのこ

○さとうしるほと さとうしるほと 〇さこののりさうわるとのこ

○雄殺日 雄くしと云 〇さこののりさうわるとのこ

○まろちつんづき 孟 篇愛 篇日 篇築 娼蓋老人説ニ篇つき

とを何篇の字々も書のりたるあり付たる程と落負とあるや

○源氏とは茶忍始ら密通有 案 十四第

○の息の花倒りしと云はゆりニ何法と禁より以て

之て終法と初しを云ふ け一ヶ糸葵上ノ死を案し

○おのこの傳と云は源氏之川分記より也とあり

細ニ 本事の一なり 花家要の三白みある程と松が

母のくことと死人伝に解ヲ松はく云と云こもみことと

案と始ら通スに假ニ惟克也くニテの程の傳をなす

○みそりけ け初と衣架と 梶架 延在式

○賀本 源氏廿二九月廿四の五と云事有

○くらまのとりぬ 花皮つきききと云と云 孟同

○くろくく 神と云と云

○京ものハ瘰 瘰 スト東波もいり 〇八省 ハセウ 大抵殿ノ細

○長年 長年 送使 沙院女侍勢と信有して上落の対ら傷及

○洞院 洞院 本所 〇の由シ養ス 中の冬候の君一人在定之

○洞院

○別の掃葉楊のあや作らしむ長サ守斗花

糸のいとりり足らぬと云と云

○沸息不十去らるちとありと云

牡丹花の説ニは本事記をとお道ヲ作ぬ終ハ是れヲ物也

○桐蚕院崩ス

○友の所ぞ 狼首の忌にモノナリ源氏忌ス友の皮を織六布之  
 ○弘徽殿ヲ呂后ニ比ス悪后ナリ之朱雀ヲ惠帝比ス柔弱ナリ抄  
 ○とのおとのくゆくろおのく之へバ 宿物袋  
 ○むしひそく 呼当後ナリ 細  
 ○そわらのわらふ例 細原王とよむ  
 ○改の字ノ付を中ねあせしおねるしともの之友の字の附を  
 友あねるりの之字ノ付ぞいふ  
 ○源氏ニ系ス 右系ニ通テ一日源氏の中ニ源氏ノ実を  
 志弘 庶生 採取 不捨 親そ量壽蓮の女あり  
 ○は面 彼面 〇まゝやふ やゝゝやゝ 〇小忌  
 ○帙篋竹と篋具はあたるゆゑと蓮とほひとの  
 ○花はくえ 札の御母花を杯彫ゆゑとて蓮は篋具とよむ札に

○光帝の由をく 〇もくろくをいふとあともいふ  
 ○り基つての法蓮と吾れととと影より葉つて水取はてて  
 ○十二月を春 吾おら孫河傍於あやとて落飾  
 ○西よりバリ 細ニ宮の年爵といひり院の給ひ申しと  
 ○掩韻 孟 石集の特の韻字とゆゑとて何字と推して積負とよむ  
 ○友りあかへはとりのなをれとて別をよむとてあ孟  
 ○言砂 抄 細 取 瓦 〇五面 〇五面 〇五面  
 ○言砂 信子樂律 古生樂の破 〇五面 〇五面  
 ○いふあともく 諫 傾 ナリ  
 ○衣どよあをつけとと 舌早ニ淡付 あくく  
 ○てむうそ 〇もくろくをいふとあともいふ  
 ○尚侍君 朧月 里指りの次テ初く源氏密通ハあぬの白  
 朧月の父大政大臣等て軒状シるに源氏朧月衣振相を





○長世淨厨人すまじ ソマシキトヨウリ

○らんくくくハ上藤 カシノノミノ字石居石居はゆき後

○子ら々 コトバツトトヨウリ

○作り松 新橋樂紀 墨書のく人と彩をみよと云

○枉々 味とのせめいしと云

○口号 口詩又八句詩蜀絶句とあてて一白の詩

菅相驛長ふ詩驛長莫驚時更改一采一落是春秋

畧記云

○おややけのくくく 考辞日細 勘のち勘

明 こんごうのこころ

○日月西へり天を东にめぐりと 白鹿通め

○屋ん 前のちありぬと後で入居の成之好のちありぬ

○やとく 細り

○と日 イニハジキ

○うい 見る

○等 つわがとありぬ

○陰陽 孟入乃石府を

○軟障 細い

高松軟障一堂上

又堂下

○ひら 地ニ電光張

○定 今表

○源氏 洪波

○蕩 雷電山

○衰 つゝ



○官<sup>センジ</sup>方<sup>ガキ</sup>書<sup>カキ</sup>を<sup>シ</sup>活<sup>カキ</sup>書<sup>カキ</sup>之<sup>シ</sup>明<sup>カキ</sup>名<sup>カキ</sup>上<sup>カキ</sup>在<sup>カキ</sup>しと<sup>カキ</sup>入<sup>カキ</sup>乃<sup>カキ</sup>う<sup>カキ</sup>勢<sup>カキ</sup>り<sup>カキ</sup>て<sup>カキ</sup>ち<sup>カキ</sup>日<sup>カキ</sup>と<sup>カキ</sup>云<sup>カキ</sup>

○万<sup>アララヨ</sup>葉<sup>アララヨ</sup>新<sup>アララヨ</sup>木<sup>アララヨ</sup> 慌<sup>アララヨ</sup>木<sup>アララヨ</sup>を<sup>シ</sup>去<sup>アララヨ</sup> 情<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>情<sup>アララヨ</sup>む<sup>アララヨ</sup>也<sup>アララヨ</sup>

○才<sup>アララヨ</sup>子<sup>アララヨ</sup>ども<sup>アララヨ</sup>も<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>眷<sup>アララヨ</sup>属<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>る<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 花<sup>アララヨ</sup>由<sup>アララヨ</sup>母<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>好<sup>アララヨ</sup>つ<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>る<sup>アララヨ</sup>人<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○あ<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>も<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup> あり<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>る<sup>アララヨ</sup>も<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○七月<sup>アララヨ</sup>廿<sup>アララヨ</sup>九<sup>アララヨ</sup>日<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>母<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>ふ<sup>アララヨ</sup>又<sup>アララヨ</sup>ま<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>く<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>を<sup>シ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>せ<sup>アララヨ</sup>て<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○日<sup>アララヨ</sup>記<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>ア<sup>アララヨ</sup>ラ<sup>アララヨ</sup>ハ<sup>アララヨ</sup>ヨ<sup>アララヨ</sup>

○之<sup>アララヨ</sup>上<sup>アララヨ</sup>に<sup>アララヨ</sup>く<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>し<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>け<sup>アララヨ</sup> 所<sup>アララヨ</sup>悩<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○う<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>て<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 孟<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>つ<sup>アララヨ</sup>わ<sup>アララヨ</sup>て<sup>アララヨ</sup>

○あ<sup>アララヨ</sup>や<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>け<sup>アララヨ</sup>し<sup>アララヨ</sup>ふ<sup>アララヨ</sup> あ<sup>アララヨ</sup>や<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>れ<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>之<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>し<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 解<sup>アララヨ</sup>を<sup>シ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>せ<sup>アララヨ</sup>け<sup>アララヨ</sup>

○水<sup>アララヨ</sup>く<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>て<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○出<sup>アララヨ</sup>陣<sup>アララヨ</sup>イ<sup>アララヨ</sup>デ<sup>アララヨ</sup>ハ<sup>アララヨ</sup>シ<sup>アララヨ</sup>ス<sup>アララヨ</sup>

○う<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>て<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○英<sup>アララヨ</sup>寛<sup>アララヨ</sup>平<sup>アララヨ</sup>遺<sup>アララヨ</sup>滅<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>ち<sup>アララヨ</sup>由<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>勿<sup>アララヨ</sup>過<sup>アララヨ</sup>權<sup>アララヨ</sup>正<sup>アララヨ</sup>二<sup>アララヨ</sup>人<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>中<sup>アララヨ</sup>に<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○正<sup>アララヨ</sup>一<sup>アララヨ</sup>人<sup>アララヨ</sup>持<sup>アララヨ</sup>十<sup>アララヨ</sup>人<sup>アララヨ</sup>也<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>り 了<sup>アララヨ</sup>後<sup>アララヨ</sup>ま<sup>アララヨ</sup>る<sup>アララヨ</sup>官<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>印<sup>アララヨ</sup>を<sup>シ</sup>い<sup>アララヨ</sup>づ<sup>アララヨ</sup>ま<sup>アララヨ</sup>す<sup>アララヨ</sup> 後<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>

○字<sup>アララヨ</sup>加<sup>アララヨ</sup>ル<sup>アララヨ</sup>也<sup>アララヨ</sup>

○海<sup>アララヨ</sup>女<sup>アララヨ</sup>也<sup>アララヨ</sup> 大<sup>アララヨ</sup>海<sup>アララヨ</sup>女<sup>アララヨ</sup> 云<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 万<sup>アララヨ</sup>十<sup>アララヨ</sup>に<sup>アララヨ</sup> 君<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○阿<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>の<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>て<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○ま<sup>アララヨ</sup>く<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○濠<sup>アララヨ</sup>標<sup>アララヨ</sup>

○二月<sup>アララヨ</sup>廿<sup>アララヨ</sup>余<sup>アララヨ</sup>日<sup>アララヨ</sup> 冷<sup>アララヨ</sup>泉<sup>アララヨ</sup>院<sup>アララヨ</sup>即<sup>アララヨ</sup>位<sup>アララヨ</sup> 兼<sup>アララヨ</sup>在<sup>アララヨ</sup>始<sup>アララヨ</sup>桐<sup>アララヨ</sup>帝<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○目<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 洞<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>あ<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○三月<sup>アララヨ</sup>十<sup>アララヨ</sup>六<sup>アララヨ</sup>日<sup>アララヨ</sup> 明<sup>アララヨ</sup>上<sup>アララヨ</sup>産<sup>アララヨ</sup>女<sup>アララヨ</sup>子<sup>アララヨ</sup>

○清<sup>アララヨ</sup>伶<sup>アララヨ</sup>亮<sup>アララヨ</sup>明<sup>アララヨ</sup>鏗<sup>アララヨ</sup>鏘<sup>アララヨ</sup> 記<sup>アララヨ</sup>日<sup>アララヨ</sup>本<sup>アララヨ</sup> 了<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 了<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 了<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○了<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>ら<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup> 了<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>り<sup>アララヨ</sup>と<sup>アララヨ</sup>云<sup>アララヨ</sup>

○あひまき 孟 ヒトハニ 遍之 抽罷 ヒトハニ もろくともて 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○大藏官の御内侍と云ふの大臣の上も 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○弟吉原ノ所子東宮之立 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 弟吉原ノ女侍 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○花中は 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

〇院の 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○宿曜師 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○いりよは河 五十日

○源氏大 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○細 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○童 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○河 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

○ 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任 〇穢 ヒトハニ と 不任

蓬生 源氏廿七卷分廿八章末と結合の事と云

末摘花ノ事と云力書リ源氏流テハ移リ久敷向ハ蓬登格  
前草滋庭中大木深更無人向三徑絶狐兎走四壁破テ  
鬼魅嘯朝ニ暮四食絶而賣古物欲周之然末摘以為先  
考以此器宝残我見今不忍賣之不許處貧窮然聊ア  
不動心末摘嫉誘之富貴不變操確字不可移之志  
源氏見之興感既深 抑々ををくりけたまふ辰多ひそ好  
勢の院といふ名は御しあひ

○ころゆえりして花用と云々のものもさ用ひてと

○このあまふ どのいさなりきひとては悟りてと

○唐守藤原射が自焚棄婚 してて在キ物依在

○刀自とも肉伝不ると又孫家の末よりいふ女をそ刀自と云

女のまなろを御し

○弊ニサグル 子もさぐりめてあはれと

○<sup>カンヤカミ</sup> 御屋 御屋のいふ小中平也の中と南へ流進をさ川なり

○<sup>仁</sup> 御屋のいふ号と云々はあまの御屋をいふ

○<sup>伊</sup> 花苗 花は有仁公とハ珠粒ととりかへしは 松尾を住院

○<sup>花</sup> 尾の移ととりかへしと云

○<sup>い</sup> びり びりいふと云々 御屋のいふと云々と云

○<sup>あ</sup> まい びりいふと云々 御屋のいふと云々

○<sup>家</sup> 母のいふと云々 御屋のいふと云々

○<sup>と</sup> 親のいふと云々 御屋のいふと云々

○<sup>お</sup> まい びりいふと云々 御屋のいふと云々

○<sup>あ</sup> まい びりいふと云々 御屋のいふと云々

○<sup>末</sup> 摘ノ髪 九尺九寸ありと云

○<sup>う</sup> づら ぶらぶらありと云

○<sup>い</sup> ぬ ぶらぶらありと云

○<sup>の</sup> えり ぶらぶらありと云

○<sup>い</sup> ぬ ぶらぶらありと云

○<sup>い</sup> ぬ ぶらぶらありと云

○<sup>い</sup> ぬ ぶらぶらありと云

○<sup>い</sup> ぬ ぶらぶらありと云

不覚悟<sup>アツク</sup>云々 葦原長房の墓方の一角よりなり  
 ○ 惟光 源氏の忍行や三いつくもあはれなる  
 ○ しくろやまきととりつを ありの所よりなり

園屋 源氏廿八巻の九月の事

○ 柳<sup>夜瑠往</sup>がく<sup>来</sup>あてうひらう<sup>訓</sup> ちまびらう<sup>訓</sup>  
 ○ 源氏<sup>夜瑠往</sup>の忍行や三いつくもあはれなる  
 ○ ちまびらう<sup>訓</sup> ちまびらう<sup>訓</sup>  
 ○ 小君の源氏長房の書方<sup>夜瑠往</sup> 源氏長房の書方<sup>夜瑠往</sup>  
 ○ 常陸も<sup>夜瑠往</sup> 常陸も<sup>夜瑠往</sup> 常陸も<sup>夜瑠往</sup>  
 ○ 常陸も<sup>夜瑠往</sup> 常陸も<sup>夜瑠往</sup> 常陸も<sup>夜瑠往</sup>

惣志せしうを方野いりて尾とらうなり

陰合 源氏廿八巻の所

○ 前編より入内 梅無世傳は秋好の中を号す弘徽殿の女房と  
 ○ 大敵 柳の忍行や三いつくもあはれなる  
 ○ 打ちの<sup>夜瑠往</sup> 打ちの<sup>夜瑠往</sup> 打ちの<sup>夜瑠往</sup>  
 ○ 梅の<sup>夜瑠往</sup> 梅の<sup>夜瑠往</sup> 梅の<sup>夜瑠往</sup>  
 ○ 春梅<sup>夜瑠往</sup> 春梅<sup>夜瑠往</sup> 春梅<sup>夜瑠往</sup>  
 ○ 秋菊<sup>夜瑠往</sup> 秋菊<sup>夜瑠往</sup> 秋菊<sup>夜瑠往</sup>  
 ○ 万木<sup>夜瑠往</sup> 万木<sup>夜瑠往</sup> 万木<sup>夜瑠往</sup>

ぐの葉もよほりて花とくろくくをよほりては梅枝の葉  
めのち世綬の字とくろくをよほりて組玉をよほりては梅のちり  
くくをよほりて組玉の葉とくろくをよほりては梅のちり  
くくをよほりて組玉の葉とくろくをよほりては梅のちり

○冷泉院 院とくろくをよほりては梅のちり

○こぞいふ 細このむびと

○神代 細花をよほりては梅のちり

○わらう 世信うくく行れ細花をよほりては梅のちり

○うんやうと 細花をよほりては梅のちり

○ぶ三位 細花をよほりては梅のちり

○朱雀院 別の掃と大御殿めくくは梅のちり

と恨く糸一糸とやれ引ちくく弘泉院とくく糸一糸と  
あつちくく糸一糸とやれ引ちくく弘泉院とくく糸一糸と

○大ごくでん

○花の海に花をよほりては梅のちり

○花の海に花をよほりては梅のちり

○山吹 花をよほりては梅のちり

○あなづらよけ 花をよほりては梅のちり

○先始相帯の源氏よ 花をよほりては梅のちり

○政ごけ 花をよほりては梅のちり

○花をよほりては梅のちり

おいらんぞやを解の風依とよむんぞうし

。どれこのの ちかきこののちり

。嘸語氏のオ学ホ比暖峰語氏信ふこと云云 モシサイ 文ヤ

招風 語氏 木葉の秋をるのりり

花形里西の村母よきまふ。唄ん上兼母上具相君

上洛して大井の殿よほに

。飯邸ア太情のさき ちミニブヲウラとやうよびまふ

ミブヲウラとやうよびまふ

。蜂啼りてを 細らうろくふとさうとく 獲まの神也

。山はさきより ねの形と山はと云 花をよむ細作勢造

の耐しゆはまらあさむ。又雪侍も先入とらると山よき  
の今めまひのちかきとさうまひよくはらまきぬとら

。いささ井 小井

。いささ井 小井 盆ちと細くせのそくさうとら

。八重き山 山 細雲のこころ。あひのさきと

。こころや 木のあき

。絶句 せくしやうびと

。御前 のつて 御の前と云ふと云ふし 山の雲のあは

。物節 を 春の今人の中に春遊ふをいなる者ぞ云

。唄ん上方は月よつたひの山とらうらありと云云

。落る云 語氏 二 早秋の冬方への年可丁の秋と云

唄ん娘君 二 幸院 也 ね

。尼鬼 ち ちねりつとらうとのちる物 仙居抄 福屋山 也 是

ねのちねらうとらねと云



。唯る力の以ては引張りの如く 弄一動云今ノ世ノ事ノ人  
。頗如是の本考と地とを人とし少神と云はるる事あり

。別當 べし

。さし山ん おくまんと

。天変を 左帝の是と海の乃也物と云ふ

。うけご後 ふうと云ふ事あり

。為る亦七なる病連之 此年の重危はるの修め

。其の所は此の年あり

印

。為る命の終る一ノ如く切徳の事なりと云ふ

。世に今の形待は是と歸る事あり

。為る此の 獲麟及とく人の事ありと云ふ

。史記注掲冠子日徳万人 有謂之俊徳千人有謂之憂  
徳百人有謂之英也

。為るの母も切徳の傍に傷く此の事ありと云ふ  
院也此の父も切徳と云へば讀文竟り形勢ナ欺也  
但し冷を源の事ありと云ふ事あり

。源は帝の父也此の事ありと云へば又為る。槿の  
院の父也此の事ありと云へば又為る。槿の

。さし山ん おくまんと

。秋存秘文ニ案院ニ此の源と父子の事あり

。あさりいし 不祥

。いさりやいし 不祥

。明之上ノ事也此の事ありと云ふ事あり

。求食 一サリ万

槿

源氏世二葉九月分冬迄の徒

○声コト太コトくコトみコトこコトろコトぐコトくコト

こコトろコトぐコトくコト

くコトみコト音コト通コトえコト骨コトのコト徒コト

○源氏カミ挑カミ菊カミノカミあカミみカミ酒カミりカミ槿カミ花カミをカミ 御カミ宿カミをカミ

○神カミ用カミ 神カミ翁カミ 閑カミ雅カミにカミ

○若カミさカミやカミりカミ 孟カミ わカミざカミやカミりカミ日カミ又カミれカミ

○初カミゆカミりカミのカミ花カミ 四カミ方カミ方カミとカミあカミらカミむカミじカミとカミ

○やカミとカミ六カミ山カミ文カミをカミ 而カミ源カミ氏カミ内カミ作カミのカミ障カミのカミ役カミとカミ文カミとカミさカミふカミ

○あカミがカミくカミしカミとカミしカミひカミとカミをカミ 花カミ健カミのカミ片カミ々カミとカミ

○源カミ内カミ侍カミ従カミ桃カミ菊カミ文カミニカミ尾カミとカミりカミ七カミ十カミ一カミ許カミ州カミとカミ源カミ三カミ建カミ

ふカミすカミふカミ舌カミつカミさカミせカミらカミらカミふカミれカミんカミとカミとカミ櫻カミ田カミ入カミりカミとカミ云カミ

○酒カミのカミ海カミとカミ花カミ葉カミ紙カミとカミさカミ神カミとカミさカミのカミあカミらカミるカミのカミあカミらカミるカミとカミ云カミ

のカミ月カミ夜カミとカミ云カミ但カミ多カミ時カミ流カミ希カミのカミ花カミ葉カミ紙カミはカミあカミらカミるカミとカミ云カミ

徒カミのカミ油カミとカミ父カミ元カミ情カミのカミあカミらカミるカミとカミ云カミ

月カミ雲カミのカミ花カミもカミあカミらカミるカミとカミ云カミ

そカミのカミあカミのカミあカミらカミるカミとカミ云カミ

侍カミ師カミのカミ身カミのカミ冷カミ熱カミとカミとカミ少カミ物カミ管カミのカミ日カミ記カミ何カミ海カミにカミ

真カミのカミあカミらカミるカミ姫カミのカミあカミらカミるカミとカミ云カミ

○紫カミの上カミ源カミ氏カミ槿カミはカミあカミらカミるカミとカミ云カミ

童カミ氣カミとカミくカミ 口カミのカミあカミらカミるカミとカミ云カミ

ゆカミくカミつカミけカミがカミれカミとカミ 物カミくカミつカミけカミとカミ貪カミ之カミ力カミとカミ入カミらカミるカミとカミ云カミ

貪カミ生カミ 遊カミ仙カミ崖カミ



さしむ白紙に儒者のていを職せしむ傳り云々  
 を作法いと輕忽也俳優彩樂のしくまらぬ傳る  
 其賦の傳布といふと風かんてー孟津抄傳布  
 倉窮如とのらまこといふ好し

○抄の凡<sup>極</sup>のひのわ<sup>郷</sup>あ<sup>給</sup>いひ<sup>給</sup>くま<sup>給</sup>り<sup>給</sup>ふ  
 傳布の詞<sup>事</sup>大谷<sup>事</sup>の<sup>事</sup>人<sup>事</sup>移<sup>事</sup>の<sup>事</sup>印<sup>事</sup>の<sup>事</sup>交<sup>事</sup>り<sup>事</sup>を  
 何<sup>事</sup>の<sup>事</sup>云<sup>事</sup>を<sup>事</sup>云<sup>事</sup>

○さる<sup>事</sup>ぐ<sup>事</sup>ぐ<sup>事</sup>は<sup>事</sup>く<sup>事</sup> 後樂<sup>事</sup> 傳布の<sup>事</sup>種<sup>事</sup>云

○源氏由<sup>事</sup>た<sup>事</sup>あ<sup>事</sup>く<sup>事</sup>は<sup>事</sup>傳<sup>事</sup>布<sup>事</sup>を<sup>事</sup>追<sup>事</sup>や<sup>事</sup>く<sup>事</sup>七<sup>事</sup>人<sup>事</sup>と<sup>事</sup>て<sup>事</sup>不<sup>事</sup>せ<sup>事</sup>り<sup>事</sup>  
 但傳布の<sup>事</sup>風<sup>事</sup>と<sup>事</sup>思<sup>事</sup>ふ<sup>事</sup>也

○四韻 八<sup>事</sup>夕<sup>事</sup>詩<sup>事</sup>

○夕書と<sup>事</sup>社<sup>事</sup>丹<sup>事</sup>を<sup>事</sup>く<sup>事</sup>思<sup>事</sup>ふ<sup>事</sup>や<sup>事</sup>よ<sup>事</sup>く<sup>事</sup>を<sup>事</sup>か<sup>事</sup>く<sup>事</sup>二<sup>事</sup>あ<sup>事</sup>て<sup>事</sup>か<sup>事</sup>る<sup>事</sup>  
 と<sup>事</sup>急<sup>事</sup>く<sup>事</sup>ふ<sup>事</sup>万<sup>事</sup>の<sup>事</sup>あ<sup>事</sup>く<sup>事</sup>二<sup>事</sup>系<sup>事</sup>院<sup>事</sup>に<sup>事</sup>坐<sup>事</sup>也<sup>事</sup>月<sup>事</sup>に<sup>事</sup>之<sup>事</sup>を<sup>事</sup>程<sup>事</sup>大<sup>事</sup>ま<sup>事</sup>ん

系<sup>事</sup>り<sup>事</sup>の<sup>事</sup>あ<sup>事</sup>く<sup>事</sup>云

○兼<sup>事</sup>大学<sup>事</sup>寮<sup>事</sup>の<sup>事</sup>く<sup>事</sup>学<sup>事</sup>の<sup>事</sup>生<sup>事</sup>と<sup>事</sup>く<sup>事</sup>る<sup>事</sup>也<sup>事</sup>と<sup>事</sup>察<sup>事</sup>試<sup>事</sup>と<sup>事</sup>史<sup>事</sup>記<sup>事</sup>と<sup>事</sup>讀<sup>事</sup>み<sup>事</sup>  
 め<sup>事</sup>て<sup>事</sup>能<sup>事</sup>く<sup>事</sup>く<sup>事</sup>ま<sup>事</sup>ら<sup>事</sup>人<sup>事</sup>と<sup>事</sup>擬<sup>事</sup>文<sup>事</sup>章<sup>事</sup>生<sup>事</sup>と<sup>事</sup>補<sup>事</sup>れ<sup>事</sup>擬<sup>事</sup>進<sup>事</sup>士<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>  
 史<sup>事</sup>記<sup>事</sup>の<sup>事</sup>難<sup>事</sup>と<sup>事</sup>同<sup>事</sup>よ<sup>事</sup>る<sup>事</sup>系<sup>事</sup>内<sup>事</sup>に<sup>事</sup>之<sup>事</sup>系<sup>事</sup>也<sup>事</sup>通<sup>事</sup>の<sup>事</sup>及<sup>事</sup>才<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>  
 ○夕書大<sup>事</sup>内<sup>事</sup>記<sup>事</sup>と<sup>事</sup>師<sup>事</sup>と<sup>事</sup>史<sup>事</sup>記<sup>事</sup>の<sup>事</sup>文<sup>事</sup>及<sup>事</sup>流<sup>事</sup>通<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>  
 ○つ<sup>事</sup>ま<sup>事</sup>の<sup>事</sup>あ<sup>事</sup>く<sup>事</sup>不<sup>事</sup>沙<sup>事</sup>細<sup>事</sup> 忘<sup>事</sup>れ<sup>事</sup>た<sup>事</sup>る<sup>事</sup>也<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>  
 再<sup>事</sup>不<sup>事</sup>妻<sup>事</sup>の<sup>事</sup>不<sup>事</sup>氣<sup>事</sup>と<sup>事</sup>付<sup>事</sup>く<sup>事</sup>能<sup>事</sup>く<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>

○大内<sup>事</sup>記<sup>事</sup>抄<sup>事</sup>の<sup>事</sup>学<sup>事</sup>の<sup>事</sup>あ<sup>事</sup>く<sup>事</sup>二<sup>事</sup>軒<sup>事</sup>曲<sup>事</sup>丹<sup>事</sup>の<sup>事</sup>世<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>  
 ○文人<sup>事</sup>の<sup>事</sup>文<sup>事</sup>章<sup>事</sup>生<sup>事</sup>擬<sup>事</sup>生<sup>事</sup>の<sup>事</sup>擬<sup>事</sup>文<sup>事</sup>章<sup>事</sup>生<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>  
 二<sup>事</sup>ら<sup>事</sup>り<sup>事</sup>方<sup>事</sup>界<sup>事</sup>の<sup>事</sup>字<sup>事</sup>多<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>  
 進<sup>事</sup>士<sup>事</sup>と<sup>事</sup>て<sup>事</sup>あ<sup>事</sup>く<sup>事</sup>進<sup>事</sup>ぶ<sup>事</sup>と<sup>事</sup>擬<sup>事</sup>文<sup>事</sup>章<sup>事</sup>生<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>  
 苑<sup>事</sup>方<sup>事</sup>界<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>

○秋<sup>事</sup>は<sup>事</sup>夕<sup>事</sup>書<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>  
 秋<sup>事</sup>は<sup>事</sup>夕<sup>事</sup>書<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>と<sup>事</sup>云<sup>事</sup>也<sup>事</sup>

○ 取由とて筆と引紙のよき結を押しとまり

○ 内明系知信ヲ明父知子ヲ史記 知子ヲ莫如父 皇紀

○ 後言シリウゴト尚云

○ 内府葵ノ上ノと原中よりわきを威勢争うたおれと云

○ 冠者タカ内大臣四云腹信と云升ノと通云あり

内府わき母大文ツ怒る云升ヲ内府の館母梅氏

夕旁十二 云升 十四

云升ヲ波サとて弘徽尼ノ女侍内府ノ腹信モ不世冷帝

と要して音結と梅氏言と社好中信氏ノ上梅と云

奪立后らとこと恨くるなり

○ さくさり細はりくことさきさき 鶴字と

○ 花みくせとま枝の勢と云云

○ 青摺の紙 雲子細み蟻とつく紋と指きと云

○ ちりり細注ぐ ちりりちりりちりり

○ ちんちん 細女と

○ 漢中あをり 細儿帳ノ隔チ 孟漢ゆきと海軍あ 漢

又云あをるさとのちりりちりりちりりちりりちりり

○ 花野里為タ旁信見下 花野のちりりちりりちりりちりり

○ 文人ノ信ヲ知シ学生ハ今日及力山と云人ト云云を替り

○ 押く云 臆病云

○ つるぐぬあまのりて 放寫試子 細放信の作文と云

中流の人をさるぬ不ありて詩を信云人ハ後合

ちりりちりりのちりり

○ 細接ノちりり学生ハ進年と云布乃の代ハ信有の勢ハ

碩頭  
泣

るくは秀也といふづきまら傷くく出る人を秀也なり  
るくは清秀の進士共法事りの士なりと夕香も換入り  
進士字礼ノ王制より出り進んで爵禄どうくさす云々  
弄一深秀也の印と皆進士と云々必の申よりのがり稀もいひ

○山平海のりや 山平のりや 三代実徳世四々大皇大后又  
十ノ等ヲ如クは近屈石字云傍中人 菅原院 大設計奈  
海法花經ヲ限リ三日ヲ記

○源氏廿四ノ八月方集院造早く楊依る 融ノは名院ヲ換  
紫上 異ノ町あり也と 花教里 長ノ町ありと云 中宮 神ノ町ありと云  
春の清茶と云

○十月 明之の上輪ノ町に楊れ冬ありと云  
○くさる孟若騰 ちよゆ香 苦丹 抄牡丹と云後を只各別ト云  
○ひぐしの比ひら 彼岸舟法成道經云一切衆生依持ニ二

八月舟十方世界一切衆離レ苦得樂靈瑞 而已  
細時正多きいふさ白といへり

- 上め 紫上ノ馬
- 宛ニ細分 孟ら向 やしと知りあそ細分今云之
- 紫苑文面 蕪芳 裏青之
- くさるこはう 舟法成道經云一切衆生依持ニ二

玉鬘 源氏廿四集の三月分十二月とあり 一説廿四ノ

- 九月分十二月とあり
- おろしあぶさび 不道
- 鹿のみぐぐ 光陸海傳の鳴那のしと云
- まうげら四集の財母夕色ノ乳母丈のが式と云 筑紫の舟
- りり十集の財母貳死ス三人ノ男子ニ遺言一して云 吾
- 考とハ馬のりやと云くはけまの考とのりやと云くは考のり

眞傳の忠臣

○おさう 細年皇の皇子の皇を承りしと 又年三宮九月

○年女之事び 精進の事と云ふ長祿臣の川男と

○肥後大寺下 監通子玉姫等と嫁セントス少武子高島三郎

父カ遺言ラニ志シテ監と同志嫡子<sup>豊後介</sup>と云ふ遺言と云り

乳母と云ふ玉姫と依り上京ス豊後介書ありと云ふ於

不厭忠孝と云へり 玉姫 二十二歳

○めづるひうんや 経廻

○東也て養育つて進者人の子と云ふと云へり 補相

○お中人の女洞の女中と云ふと云へり 辰巳と云ふと云へり

○俊備<sup>チサワ</sup>ナカニ 貞觀政要 氣取人 俊<sup>月</sup>お人 何

○三月の妻の事の終めて 藤原の御代と云ふと云へり

○肥前松浦郡鏡の神と云ふと云へり 又鏡の神と云へり

○鏡化カ名と云ふと云へり 鏡の神と云へり

○おさうと云ふと云へり 細川卿と云ふと云へり

○花おとと云ふと云へり 常苑御殿と云ふと云へり

○豊後介の妹と云ふと云へり 又と云ふと云へり 玉姫と云ふと云へり

○舸<sup>フネ</sup>と云ふと云へり ぬノ字法留と云へり

○細川 唐僖宗帝ノ后馬氏夫人と云ふと云へり 醜と云ふと云へり 仙人教

○大燃<sup>チ</sup>者 親善と云へり 源起

○けお終業と云ふと云へり 卯の卯玉姫等と云へり

○ちと<sup>夕</sup>女 長谷寺と云ふと云へり 玉姫等と云ふと云へり

○おのく 生長と云ふと云へり 思ふと云へり

白按ル 諺ノツクシ

○ 石物巻の事やさき昔も考へし又こぬより君をいふ万  
万葉一巻<sup>ニミヤル</sup>又古時流布し仙堂う長平<sup>ツカヒ</sup>著<sup>シ</sup>と長せり長良  
こぬがへるこ細

○ 源氏玉芳かきえあふ ちかばも君をあらん<sup>博</sup>由はあゆ  
三稜の物いふえい<sup>博</sup>と 三稜を飾といふんしり水

○ 十一月玉芳かき院長町<sup>博</sup>源氏ふとまるをり化  
人<sup>博</sup>言ふと魚なり是か玉芳賀屋み家一たるゆと源

氏玉玉芳<sup>博</sup>修相を度と別を所くとしともねみ実  
度とや

○ うらこのあり 細板江よ今とよを物と音ハ开とらり  
河板束らる<sup>博</sup>之うら反らる<sup>博</sup>なるぞとて男女の装束

○ うらかりの中<sup>博</sup>移り<sup>博</sup>のり<sup>博</sup>と異なり  
ふひ<sup>博</sup>澤と花面す<sup>博</sup>裏花面と<sup>博</sup>やうな梅と<sup>博</sup>たつ

○ 細板多<sup>博</sup>い面白<sup>博</sup>は<sup>博</sup>中<sup>博</sup>あつ<sup>博</sup>い<sup>博</sup>り<sup>博</sup>い<sup>博</sup>細<sup>博</sup>花<sup>博</sup>さ<sup>博</sup>く<sup>博</sup>ハ<sup>博</sup>面白<sup>博</sup>く<sup>博</sup>裏  
る<sup>博</sup>ひ<sup>博</sup>澤<sup>博</sup>の<sup>博</sup>い<sup>博</sup>り<sup>博</sup>と<sup>博</sup>花<sup>博</sup>の<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>や<sup>博</sup>の<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>り<sup>博</sup>と<sup>博</sup>つ<sup>博</sup>や<sup>博</sup>め<sup>博</sup>と<sup>博</sup>ら

○ 海<sup>博</sup>廻<sup>博</sup>の<sup>博</sup>海<sup>博</sup>賊<sup>博</sup>の<sup>博</sup>賊<sup>博</sup>花<sup>博</sup>海<sup>博</sup>津<sup>博</sup>と<sup>博</sup>大<sup>博</sup>波<sup>博</sup>み<sup>博</sup>る<sup>博</sup>具<sup>博</sup>る<sup>博</sup>の<sup>博</sup>故<sup>博</sup>賊<sup>博</sup>  
き<sup>博</sup>たり

○ うらり<sup>博</sup>く<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>る<sup>博</sup>き<sup>博</sup>山<sup>博</sup>の<sup>博</sup>細<sup>博</sup>り<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>く<sup>博</sup>赤<sup>博</sup>と<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>り<sup>博</sup>と<sup>博</sup>山<sup>博</sup>の<sup>博</sup>  
表<sup>博</sup>朽<sup>博</sup>葉<sup>博</sup>く<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>梅<sup>博</sup>花<sup>博</sup>と<sup>博</sup>云

○ 花<sup>博</sup>ま<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>ひ<sup>博</sup>の<sup>博</sup>賊<sup>博</sup>ゆ<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>く<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>ふ<sup>博</sup> 尾<sup>博</sup>の<sup>博</sup>忘<sup>博</sup>ル<sup>博</sup>との<sup>博</sup>  
袖<sup>博</sup>の<sup>博</sup>の<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>る<sup>博</sup>と<sup>博</sup>ち<sup>博</sup>ひ<sup>博</sup>ぬ<sup>博</sup>く<sup>博</sup> と<sup>博</sup>の<sup>博</sup>の<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>る<sup>博</sup>こと

○ 木<sup>博</sup>奇<sup>博</sup>の<sup>博</sup>の<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>く<sup>博</sup>書<sup>博</sup>者<sup>博</sup>と<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>有<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>る<sup>博</sup>髓<sup>博</sup>腦<sup>博</sup>又<sup>博</sup>演<sup>博</sup>成<sup>博</sup>式<sup>博</sup>拳<sup>博</sup>七  
病<sup>博</sup>喜<sup>博</sup>撰<sup>博</sup>式<sup>博</sup>有<sup>博</sup>四<sup>博</sup>病<sup>博</sup>孫<sup>博</sup>姬<sup>博</sup>髓<sup>博</sup>腦<sup>博</sup>有<sup>博</sup>是<sup>博</sup>ホ<sup>博</sup>之<sup>博</sup>弄<sup>博</sup> 廉<sup>博</sup>主<sup>博</sup>石  
見<sup>博</sup>女<sup>博</sup>髓<sup>博</sup>腦<sup>博</sup>とい<sup>博</sup>は<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>考<sup>博</sup>わ<sup>博</sup>奇<sup>博</sup>集<sup>博</sup>之<sup>博</sup>新<sup>博</sup>撰<sup>博</sup>髓<sup>博</sup>腦<sup>博</sup>と<sup>博</sup>公<sup>博</sup>任<sup>博</sup>子<sup>博</sup>撰<sup>博</sup>之<sup>博</sup>  
いと<sup>博</sup>や<sup>博</sup>り<sup>博</sup>て<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>く<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>る<sup>博</sup>の<sup>博</sup>衣<sup>博</sup>と<sup>博</sup>あ<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>る<sup>博</sup>た<sup>博</sup>今<sup>博</sup>  
作<sup>博</sup>悉<sup>博</sup>ル<sup>博</sup>人<sup>博</sup>ヲ<sup>博</sup>考<sup>博</sup>カ<sup>博</sup>シ<sup>博</sup>ト<sup>博</sup>思<sup>博</sup>ハ<sup>博</sup>と<sup>博</sup>考<sup>博</sup>ら<sup>博</sup>と<sup>博</sup>司<sup>博</sup>ル<sup>博</sup>ゆ<sup>博</sup>童<sup>博</sup>書<sup>博</sup>菩薩<sup>博</sup>の<sup>博</sup>名<sup>博</sup>と



しるして其の衣とくらしくはるく寝ると

初音 源氏世言集四月の段

○ 齒因 ちのひとくしつとせ

○ ちつとと蒲葎つとくしと云 作時流を筆勢ヲ拙く入るに蒲葎

○ 唐のちとくをくつ子のちとくしと云 藤原トタルナリ

○ 勢多作とく白き唐袴之君者の苗有り細舒明天皇ノ御宇ニ

以テ唐ノ東京袴ヲ吾邦ニ移入りしと云云 兵部卿 延喜式

○ 白地袴四方二寸表蘇芳平袴也極之苑

○ 僧之樂は敬 夜ささくさのさ門をよりを引とのつろ

○ ちりや度つくりやなりや 凡そ乾 若祿好忠

○ ちりや度つくりやなりや 凡そ乾 若祿好忠

○ 集 さきとそるちつとくしと云 ちりや度つくりやなりや

○ 万葉之枝とくしと云 凡そ乾 若祿好忠

○ 碓礪の河内型ま摘の足ら見と鼻の赤さと云

○ 水むゆくとくしと云 凡そ乾 若祿好忠

○ ちと水解と云 凡そ乾 若祿好忠

○ ちと水解と云 凡そ乾 若祿好忠

○ ちと水解と云 凡そ乾 若祿好忠

○ ちと水解と云 凡そ乾 若祿好忠

○ ちと水解と云 凡そ乾 若祿好忠

○ ちと水解と云 凡そ乾 若祿好忠

○ ちと水解と云 凡そ乾 若祿好忠

○ 万春樂 西宮抄云 誦奇ノ白舞人起 在唱 万春樂云云 花と

○ 柳方去樂云云 誦奇ノ白舞人起 在唱 万春樂云云 花と

○ 万春樂と云云 誦奇ノ白舞人起 在唱 万春樂云云 花と

○ 元正慶序年光聲云 万春樂 僧も樂淡海 三弘 寸く多氏

傳之之云

胡蝶

源氏物語和之云 三月四月のこと

○あつとさ 信も樂律 去柳とくさあふりそ ともや

○さよのともやわのわをいひまるとともや 梅の花さや

○ふかぐわりの人 孟人 二冊きりく思之唐 天守夜引

○こころさし 信巻縮のこころ 花正縮と縮つと云 梅 横公成

○發馬名大ね 兼考肌 出所 兄弟 赤美の仰文之西ノ對ノ始之を

つと迷らん 玉こ

○意の山をさくすのころれ 孔子 信 信馬 實信 人の

○意の山をさくすのころれ 孔子 信 信馬 實信 人の

○花をさくすのころれ 西にお梅くすま 卯 龍とを 西白裏萌

芳より

○めしきし 細衣人之意之 ちわね 終 蜻蛉の 日記 ありき

○ 日あつとをさかむり

雲

源氏物語の芥川のこと

一説 云々

○ 二月 人よわが 終結と云 五月と忌と 花をさかむり 細

信代よりいひとあるさ 五月のころと 人よわが 終結

信明集

○ 如案 あのと

○ とさむりりとも 細 適財よのさかむり

○ 細つとさ 是のわさきとの 都とさし かつやとらあが

○ 唐衣 弄裳とさる 舞よさかむり 唐衣とも

○ 草蒲がさし 花表ま 裏濃お梅の 信 而ま表白との

○ 花さし 花のさかむり 唐衣の 花さし 表菴芳

○ 裏ま 花さし 花のさかむり 唐衣の 花さし 表菴芳

うまをさうしんりえんごり

○ 花教後十二地神常言我負大地一切所有及須弥山  
不以為重亦无厭心於三種人厭倦不欲任持  
棄息親不孝父母云

○ 二氏の物語 極楽城も物語の名も出せり 石傳世と云

常世夏 源氏寸草集千巻 一説二世又

○ いしがさの物語 石傳 継健

○ 水版 スイバシ 細 之の世もありてひめと云ぬ之味干版などの

類水つけ置ひぬを版とあつくして冷水之は冷汁が食

○ 牛麦 石竹 日 金銭 白氏文集

○ 本琴うるまうく別めゆるまのぬくまをけるま樂器の

弓ハ張形と化してくやま ときけとれ

○ 之のつらハ男おとハ萬書家と云女友と云書二冊と云

本琴を書司の妙房祝り申し名と云水引と云又朽木ハ  
字多法師と云和琴の名物之書初の巻にゆりもの樂器が  
上におもて是とぬのぬやと云るなり

○ とびまびり細 ともひと源のりさうりうあ神とより

まびりハむねと云いさぬはくしと形

○ きやうさうさうさうぬあしひ げんげん

○ くらいつまうくさひぬら 久さハくうくく一巻をシタマドと

○ 御言言 福さうと云このまをたん福と云そを歎きの歌と

○ 内府是か茶おとく後の子をけのをを求けり 鳥羽ち  
ぢうふさすけが。あつさすづさたさう声のあけつけさ  
こるそれきりと悉皆物語の程を書け集笑し三人  
石仕人のみ茶と云くくくうらひととせらよ  
あつめきて小簀と云いし声そいと云と云と云

泥土ちり細りてくしき一説歌のちりきき云々不丹  
あつつけ ちりあつて 小簀 ちりきき目とおひのちり  
こりこ ちりきき ちりきき ちりきき

○ 抄りて 抄りて 味 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて  
花大草 近松林院式 ちりきき 抄りて 抄りて 抄りて

○ 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて  
抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて

○ 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて  
抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて

○ 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて  
抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて

○ 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて  
抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて

○ 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて  
抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて

四二

篝火

源氏物語の秋の始り

○ 源氏物語の秋の始り 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて  
抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて

野分

世嘉平八月の及

一説歌

○ 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて  
抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて

○ 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて  
抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて 抄りて

白氏文集

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

抄りて

○孟鎮帷庫とてル丁など所上をとりてひらきしもの  
 ○暮ヨリ大風良ヨリ吹折リ大木飛ス屋瓦到レ曉ニ和ス  
 ○とらごうとて孟敬之師思まらるる先づ心困ノ字  
 ○夕旁風ノ終ニ始ラ紫上ラ祝見テ速ニ心ハ  
 ○其後ニルビナキ障のうさ  
 ○とみ久しものうさら女身死ハ而ノ望まらぬは環  
 衰りしころり  
 ○あえりかゆらるる孟 おられがゆらるる  
 ○おそびつらく物か細ゆる痛らるるふらひり松葉の上  
 あり孟 ことごとくけそひらりなどふららるる  
 ○は年頼海連 年老する女房之式細竹

行幸 <sup>ユキ</sup> 源氏世六ノ十二月分廿七ノ二月迄 一説世六

式後ニ天子のど行まると云院のど滞すを尋ねみゆとまむ  
 ○うちうらり細くゆらるる雲霞りあつて  
 ○もどけくはまこと不出者か心の誓りまらうといふ  
 ともぐささると云れ又侍まらるる心又居るをナルヤ所 のど  
 うちせと  
 ○水菫屋の湯ゆひ明名娘君ハ秋好中女 玉簪ハ父内大臣  
 男女あやうし 元服のか冠のこと  
 ○梯のトまきを西テ白くうらるる  
 ○あもすひらり 歩陣  
 ○考及やまはまき 考及ハ勘南之細  
 ○あつてうらるる細あつてうらるるあつて 何はあつてうらるる  
 づらうらるるあつてうらるるあつて 何はあつてうらるる  
 あつてうらるるあつてうらるるあつて 何はあつてうらるる

○藤原公家花濃みあつらへ入つる程は深きと云へり  
○未摘花の奇の神一個と云へり一層衣と云は是と云ふ

くし衣（紅）衣を衣くし衣くし衣くし衣くし

○せりしの人と云へり 衣は衣の 妙少く

○短奇 衣を衣くし衣くし衣くし衣くし

○衣は衣を衣くし衣くし衣くし衣くし衣くし

○二月十日玉鬘水裳衣 父内府御給付御給付御給付

○衣は内府の子たるし衣たるし衣たるし衣たるし

内府の子たるし衣たるし衣たるし衣たるし

友袴

源氏公七月九月 三月から六月 月のとある

一鏡廿六

○蘭らよとりとりとりとりとりとりとりとりとりとり

○玉鬘内侍のくし衣 孟里亭より但尚侍（イナカニ）而後入

内のはまお通り

○けざらぎら清 伶亮 衣のぬきいとくし衣

○花服者ノ巻纏（マキ）衣くし衣くし衣くし衣くし

○手とくし衣くし衣くし衣くし衣くし衣くし

○宰相中（ナカ）夕（タ）方（カタ）衣は源氏水使玉鬘衣くし衣くし

○格（カ）鞆（タヌ） 衣くし衣くし

○昨九月ハ世依季のくし衣くし衣くし衣くし

○九月西ノ村（ムラ）姫（ヒメ）念（ネン）念（ネン）人競（ヒコ）テ（テ）奇（キ）衣（イ）玉鬘（タマ）螢（ホタル）衣くし衣くし

くし衣くし衣くし衣くし衣くし

よみ衣程

源氏公十月から十一月とある 一鏡廿六

十月分（ツキ）廿七ノ十月と書（カキ）衣は秋の夕のくし衣くし

よ一年とつくもいふ年の秋と云うなり

○玉琴の心と云ふにわづらひの心は  
つとむるに年々ささるるの心は

○けくささるるは 心はわづらひの心は

○けくささるるは 心はわづらひの心は

○けくささるるは 心はわづらひの心は

○けくささるるは 心はわづらひの心は

お射して腹をささるる心は

○けくささるるは 心はわづらひの心は

○けくささるるは 心はわづらひの心は

○けくささるるは 心はわづらひの心は

○愠入 老子経 くとむる心

○松皮多岐 葉の御まぐらうなり

○下葉の心は 葉の御まぐらうなり

○春冬ハ柳と云ふに 柳の御まぐらうなり

○葉の御まぐらうなり 柳の御まぐらうなり

○別と云ふに 柳の御まぐらうなり

○玉の心は 柳の御まぐらうなり

○通流と云ふに 柳の御まぐらうなり

○二月 柳の御まぐらうなり

○二月 柳の御まぐらうなり

拈







○花重船を徳爵給の三の舟に一もあはせと書る者あり

○朱雀院出家

○源四十 二月十日 姉之文云朱雀院へ泊りて源氏の本を隠し置る

○朱雀院弟三ノ女之女二女四を母とてしるし其母安ん  
くみ女之を一入を深き机源氏ヲ懐尼母頼とてあり

○朧月夜為侍住二條宮源氏志行く密通

○檳榔 孟ビリヤウと候

○念仏 ト云云

○壁代 白き衣とくひのてあてりてあり

○御地衣 細唐蓮を纏とてしるし之 花ハ唐蓮  
大女の言縁源と対するもの

○一切のゆめ致をど。わやめと云定あつて現は

○花津器有臺并蓋 咲動んだりの歌

○うづの管 ころみりりの第なごの歌

○源氏四十ノ賢 簞物折櫃等各四ノ致シ用ゆ

○うづりもぐりもぐり 雨とて神

○おつぎハ袖しそりハ袖の衣ありとてやうよ書るもの

○平仲ウツリとて書物浴より

○最勝王経 壽命経

○白氏文集 驪宮高 吾君不遊有深意一人出 兮不容易  
云云中人之産數百家未足充君一日ノ費ト云云

○源氏四十一

○三月十余日唯女源山産 十四

○は源産當日上下着白持衣束九夜改復尋常

○むくのちを流湯 と扱うてああを流湯のあは

○夕方あはさし子出母の流湯と源氏を流さんせり 細

上の風をさするべき

○あまぐり 言をさする 遠子ノマウニ作レルモノナリ

○須弥ノ山 唐土に妙なる山

○十四日 移名義云々 名代に於て四百ヨカに於て物格ニハ十四日ニテに

○新つとくはよのふとく 涅槃のこと

○西島和 和右より久と云は物格を大略皇子誕生に

今

西島和と云は 味 和島の和右よりと云は 西島の和右よりと云は

○も後のまらとを梵字のやうに云ふこと

○女云々 いとくく物格と云ふことあり 眞深しぬ人こと云々

附注 女房より物格ありしこと云ふこと

○梅のちとく 表 白雲 蕙 芳

○二月於六条院在 鞠興 廿二ノ幕ノ申よりし 梅走り出さ

綱目にして云ふことありし 梅走り出さ 廿二ノ幕ノ申よりし

○ささぎのちとく 致仕物格の梅 梅走り出さ

○椿餅 椿ノ葉よりし 鞠場之司よりし

○果物 箱より 深山に云ふこと 或は鳥名の果物と云

○小竹ほぐり 細ぐりし物格ありしこと云々

若菜下

○保四下四十七ノ末ニ至ル 甲子ニ幕分四十四のちとく 是ハ物格不

○重陽の妻 近江の帝 市島月母ありし 十月ニ是と云

○二月廿二日 院弓倉 主人ありし 心は物格よりし 味 是の

○今と云ふ物格ありし 細ありしと云ふこと 是ハ物格不

後

好く御取合ふこととらるる

○柏木橋といづらん人々云 松と竹の交りたるもの心

○雲々の雲 玉衣程程志 螢の所へ入るに因循とて

二年と送り候ふ御方居の室とらる

○源氏四十七卷 冷泉院脱履 東宮受禪

○元祿の帝とて冷泉院と云始りて冷泉院と書るを

は院と云げく大寺を候ふ冷泉と云 又を冷泉の院と唱

○陪從 バイジウ 奇なることとらるる

○あうのあうがれ あれを流し 明とのあうこのこととらる

○任そめ 非樂より鼓とたたくこととらるる

○百景く ハヤシ ば千景とやらとらるるの百景や百景とやらとらる

○ののここととらるるの尻尾とてとらるる人々のひらり

○大曲 ゴウ 琴有大曲中曲小曲出 大平清見 一云云

○うらめしきことら 袈裟とらるることとらるる

○あどど 細茶椀の香麁なること

○奏舟 アヲ 濃き香とこととらるる

○春の琴のまたたきとあらはるるをみぶるありと

細 ちまひゆがこととらるる 呼ば未だ交る香在別 云云

○祭経 サツキョウ 筆ノ調子ノ経 ニツ

○源氏四十七卷 二月十九日冷泉院 ら 妙樂 ら

○苑中納 ら 占居 ら 陽と ら 律 ら 陪 ら 異朝 ハ 異 ハ 之 ニ

○樂書 云云 琴ハ動 ニ 天地 ラ 感 ニ 鬼神 ラ 苑

○日本書目 飛依世撰 琴経一卷 蔡伯喈撰 樂器四卷

○琴操之卷 晋黄陵相撰 琴法一卷 琴録一卷

○琴徳譜又卷 雜琴譜百廿卷 和畧



○まじりうくひやく 細脚カクケと云々 此病の物名なり  
明和名に脚カクケ一名脚痛ト云々ありけり  
病の物名をうり物終十のまじりうくひやくと云々

柏木

源氏四十八巻の四月分秋の末と云り  
○柏木女と云達し源氏に幼くも憂鬱し之れ終る  
をうりて死す 死後任程大御公 廿二ナリ  
○女と云産男 薫は女は是の魚似り柏木 源氏三ナリ  
昔昔為云レたセし報之とあり  
○女之宮カクケ云々糸の息を養ひ居悩ぬ尼  
夕夕方任セ柏木遺言に四月柏木の室 藤原の宮カクケ  
の一条女御後り朋友ノ意切ラわらばと云々 実了カクケ

藤原の女御意慕あり

- まじりうくひやく 五浦し八目之はまじりうくハ  
細脚カクケと云々と云々詞之物なりと云々
- 煙くくハ思ひと云々定ぬ内裏の奇命ありと云  
はまじりカクケの物名なり 明和名に程と云
- 邪宗 ぶけ 細点
- 逸言 ぶけ 論あり かなと云々
- いりの程 又十日
- 樂天五十八と云々男子と儲きり故に 牛運ト云々

横笛

源氏四十九巻 二ナリと云々の  
○大中納言に限りて権官の正友之餘の友を権正差別と云々



意之改テ夕芳ノ知に不致

○展季 真人 文

○松ヶ崎の山 山嶽ひえの山の麓氷室の如知

○室名書 室の世又信書と云はる

○悪名書 あらう 業障 べりあや

○穂とらん 油子等して 誘 コシラフ

○名のやうやうのものに意のこし小雄 大八雌 雌多奇

雄鳥ハ病リ女をおり男をほけり女なと云り

先鷹雄一 武鷹 嶋也 夕芳 雲井のこめ

おらそぐりしとめたと云

○むきろくして抄胸などのさりごと

○ひるやこのりち 云意註と書

○坎日 苑九坎日不可テ出行ス云

○山田のひしよしおとろくば 山田板原 梅女を踏係

て引るして庭と野をいとの

○何秋のよの月の光し 清々色をくし 梅の山と之は屋

○无言太子婆羅奈国王之太子其名体魄容端正

生而十三年无言 太子体魄経 其名の行も是分出タリ

○厄を抄物 文意 雲井の女 たる こと トヨムビ

○目と云りて 意同くくくく

○おろしひしりあやせめて 孟 孟 一帖 意

○山名 雌雄一不母孫なる意 独宿のともなと云

足利の山名の如の志り尾の承くしと云 雲井の如の

○夕芳 女を雲井の如く愁く巻といり 雲井の如の



夕香に向くはく。何の事ぞとよあけしうせよ孫ね  
まろししるんこれぞわくしと云おのり直ト又誠之  
。大畧只こまき事とふと云

淨法

源氏み千石秋との交あり

- 。は秋は葉上死ス 八月十日
- 。觀經云 阿弥陀去レ此ラ不遠<sup>カラ</sup>
- 。葉上葉送不 源氏葉行とて地へ出
- 。夕香葉上ノ死神と云く神分の垣石尺の意格と
- 不延ト云阿弥陀<sup>ホトケ</sup>仏くとひさまふ 云々の教ト云

初

源氏み千石ノ正月分十二月を以てしと云々  
葉上と雖忘ふら何と月とよ孫名ありと云  
せり此と云はわつと云

- 。文選云馬鬣松と云くうまひ松と云あり
- 。大室と云くさ人のうまひ松と云あり
- 。錫杖 <sup>サシヅマ</sup> 亦名ニ智杖ト彰<sup>アラハス</sup>頭聖智<sup>シ</sup>之
- 。源氏嵯峨院ニ隠迹と云く字作富本の意とあり
- 。けきノ祠めし尺中 四キ反右等ヲ焼破

旬宮 旬をうるとも又兼大おと

幼きとけきとの石カニ云べし雲隠ノ意と云々

書す一源氏光くまるといふものの名よとせり  
元氣分宿木の生る年記を離れり

蕙十四日分廿日家の春との事いふ 蕙宿あり  
持大納言の太刀と兼 異者微二百歩の外

白雲部はまると今上の元の子母を明名の中宮尚侍  
はまると蕙とさうと名をと播磨の蕙をまはし  
たふと不遍也と白と名を貪婬輕け  
の蕙子

○改の坊ごま 東宮のまうり云

○夕房 一条のま 蕙のまといしてま井とよ十二日

○善巧ビシク太子のト云 他平賀夷太子トアリ善巧ハ羅睺羅  
お名かへし未定のトナリ 細

耶輸多羅比丘尼カ之羅睺羅尊者者佛カ出家之後

經テ於六年ヲ誕生ス大臣等疑レ之耶、羅抱兒放テ火

投ス之全メ不燒 悲華經

○女人身猶有五障 一者不得作梵天二者帝釋三

者魔王四者轉輪聖王五者佛身 提婆品

○例の世人も。あやふさうな中ねとさうあてふ

○ついでと云

○宿木ノ生る夕房ノ女也と 母ハ惟光ノ女シ世々、白文娶ル  
垣下 正ガトヨム

竹河 蕙十四日と云ては年三ツ分七月と云ては

又此の年と云又年依りてと云て年くうつと

是より細 三日不詮高流の多山并の生る年

紀之部不用之人之者、依<sup>テ</sup>為<sup>ル</sup>列傳之

○杭木ありて、廣頼樹无枝也

○是分前卷更死ス其後の人

○信長之志らんぞ、いけぞ細<sup>ケ</sup>足<sup>ツ</sup>救<sup>フ</sup>之、志<sup>キ</sup>とん物<sup>ト</sup>一<sup>ツ</sup>批

判<sup>ル</sup>事<sup>ト</sup>いふ<sup>事</sup>をい<sup>ハ</sup>ふ也

○樂の石と唐<sup>カラ</sup>物<sup>モノ</sup>と云、作

○信長石の奇蹟あり、多<sup>ク</sup>政のそと

○是分先卷よりいへるが、と多く、よも程通<sup>ス</sup>る物有<sup>ル</sup>

○此本ノ終ニ、宰相とくつ<sup>ツ</sup>き<sup>ツ</sup>り<sup>ツ</sup>く

是<sup>レ</sup>字<sup>ハ</sup>別<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>て一部<sup>ハ</sup>是<sup>レ</sup>を<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>何<sup>レ</sup>を<sup>シ</sup>書<sup>フ</sup>事<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>め<sup>テ</sup>書<sup>カ</sup>る<sup>事</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>妙<sup>シ</sup>也

橋姫 字<sup>ハ</sup>一、字<sup>ハ</sup>十帖<sup>ノ</sup>と文<sup>ハ</sup>新<sup>キ</sup>者<sup>ノ</sup>も矣<sup>ノ</sup>大<sup>ニ</sup>武<sup>ノ</sup>

三位書と作説不用之、細

苑<sup>ハ</sup>桐<sup>ノ</sup>帝<sup>ノ</sup>八<sup>ノ</sup>矣。冷泉院<sup>ニ</sup>在<sup>リ</sup>矣と云、誠<sup>ニ</sup>字<sup>ハ</sup>十帖<sup>ノ</sup>也道世<sup>ノ</sup>

菴<sup>ヲ</sup>道<sup>ヲ</sup>稚<sup>ヲ</sup>子<sup>ノ</sup>の<sup>事</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>ツ</sup>、八<sup>ノ</sup>矣<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>女<sup>アリ</sup>り<sup>ト</sup>也

總角<sup>ノ</sup>の<sup>君</sup>之<sup>母</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>ツ</sup>、中<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>有<sup>ル</sup>

矣ナリ落<sup>レ</sup>胤<sup>ノ</sup>腹<sup>ニ</sup>之<sup>母</sup>を<sup>常</sup>陸<sup>守</sup>り<sup>書</sup>事<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>其<sup>ノ</sup>妻<sup>ノ</sup>名<sup>也</sup>

浮<sup>ル</sup>船<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>ツ</sup>、智<sup>ノ</sup>の<sup>君</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>ツ</sup>、美<sup>ノ</sup>刺<sup>多</sup>なり<sup>ト</sup>、雅<sup>キ</sup>也

より母<sup>ニ</sup>従<sup>ヒ</sup>附<sup>キ</sup>、市<sup>ノ</sup>按<sup>ル</sup>、市<sup>ノ</sup>氏<sup>一</sup>部<sup>ノ</sup>の<sup>姪</sup>女<sup>臈</sup>月<sup>表</sup>之

字<sup>ハ</sup>十帖<sup>ノ</sup>角<sup>ノ</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>い<sup>ハ</sup>り<sup>ツ</sup>、故<sup>ニ</sup>浮<sup>ル</sup>船<sup>ノ</sup>の<sup>始</sup>末<sup>詳</sup>ニ<sup>書</sup>ル

○篇<sup>ハ</sup>愛<sup>細</sup>玉<sup>篇</sup>なり<sup>ト</sup>、や<sup>ハ</sup>字<sup>ノ</sup>の<sup>篇</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>採<sup>テ</sup>免<sup>ユ</sup>ル<sup>事</sup>

○八<sup>ノ</sup>宮<sup>と</sup>、優<sup>婆</sup>塞<sup>ノ</sup>の<sup>文</sup>と<sup>シ</sup>て

○何<sup>レ</sup>を<sup>文</sup>殊<sup>ノ</sup>の<sup>眼</sup>之<sup>け</sup>故<sup>ニ</sup>母<sup>ノ</sup>眼<sup>ス</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>、この<sup>声</sup>を<sup>う</sup>り<sup>て</sup>

破<sup>レ</sup>石<sup>ト</sup>と<sup>シ</sup>て<sup>ハ</sup>也

浮<sup>ル</sup>船<sup>ノ</sup>舟<sup>中</sup>に<sup>在</sup>り<sup>云</sup>と<sup>シ</sup>て

面

○一度も南をり赤くあとも人のまじりまのよのやめは  
空也 拾遺

○さぶさめや 孟 さぶさめや

○こらるげぬ 細骨之を みるげぬ

○大天琵琶の搦めて。雲がくれりつる月の像よ

いとわくさしむきまが 扇をぞこまきつる月を

まよさつべりりりしてさしめさつら母と云

けは兼 從宿人ニ視見てそりり兼 ちをを兼

崎嫁院はゆげの以扇振月をと結ゆよなるねに

俗言す赤んぼ白ニ基長口漢書と云と云物を細流と

用ひあらば

○花ひをの搦とせむる宛とを隠月と云霞復午の上を

○いとふりもろくね細 じりもるりつるよと

○さむげぬ いらさきさうやして 吾をさしけを肌を

とゆの詩ニ雞皮ト云是

○さしぬさぬをそとさしびきさうり 何故眉をさ

びをアヤめ定

○詐 ハカリゴツ

紅梅 兼才一廿二章のしと には兼を別して梅

察大納言の傳と見さうり。紅梅 竹内と兼と云

○句を兼を推不とるを混礼せり 味

○琵琶とことりつ一切の結とことりつあり

奇堀川百首は玉胎を 及さうさうの上を引

ととに玉とゆく細分 け兼に事とまのれとる

るさびえのとらり

○殿上童と束帯の附ハ総角を是と云つと云殿おは

虫衣とのかそ耐をすくさくくさる

。うはぶえ物所くふ味うとぶえに細嘯こうを傳く

推本 宇治二 蕙草の春分亦二草の夏との変

。栴檀栴の山の栴檀穀栴の葉をさく栴をり細

。河をひ柳 日本紀十六郎宗湯奇 いる楚河をひ柳

多ゆめをちひさ抄さうらそのひさうせん

。抄 令よて八宮中とよび 禁裏ヲ云 一説ニ九重

。蕙と栴等のことと思ひ隠逸の志を栴栴の葉分八宮

の隠逸と慕ひを仕り而二女のことと句を三説け

句を宇治の中栴に皮と艶書と通え

。八月廿二夜中二八宮薨ス け時大君才又 中君才三

。るさ雨後よりささぐやとまゑ 花 蔀相女 趙壁り

ささぐやとまゑのささぐやといふささぐや

角総 宇治二 細 蕙物亦その秋より冬よおん

苑わけ栴さふ二つを童としり髪とつらよわける

あさうと又車もさふ糸もさくさくさくさくさくさくさく

。衣ミヤウの糸 に行香机四角結ヒ糸也 花さゆめを

包てみさの糸もて括りけて伝へるさうさうさうさうさう

ひかふと隠れ不見る 河海説可然也 五月

。ちる 細糸とくさ物とまゑとさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

祇令才六注金水桶金線狂奉ル作勢神宮

。源中御を蕙宇治へ行て時大君丹副カひるさうさうさう

大君のワ女妹と蕙へらせんと思ひ或時蕙を寝不へ入付

大忌潜母屏風の陰に隠る薫中忌と大忌と男の別外不  
 其更受初八宮も薫の更法ヲ凡しく大忌と嫁せんと欲し  
 詞も出せり而薫性緩ナル人多大忌に逼り而之に言  
 押立タルナリ婚り物なるともて終に其更受付奉りて白  
 ふふ薫よりに言法(竹薫の言似し)白更通(中忌に  
 薫の中忌と白嫁し)部を大忌と嫁せんと欲して大  
 謀る 此冬大忌病死ス

- おそろしき津を細信誘ひ女嫁せむと云 此の津は津の津と  
 して万葉才二大伴甚磨婢大納言巨勢人女ヲ奇 玉所  
 と云ふぬおもむきちらやゆふ津をばくともるぬ樹と云  
 三河守とてと衣包とのこと今の世の袋とてと似せむ物  
 ○山城のここの里よるつわとらうらうり世の君と思ひて  
 ○思ふと 石と垣のやうに つもて  
 ○伴勢物終の陰母在入申おの 小琴教くともを源氏に

伴勢物終に居る時流布の伴勢物終より伴勢物終に居る

- 不軽とつらや 細つとせとれおのとおけはひる不軽  
 著すの神のとして昔字の父と唱へりありく  
 何法経在神品云我深敬汝等不敢輕慢所以者何汝等  
 皆行菩薩道當得作佛 是凡生の仏性ありぬ  
 久方也 昨勝尾の勝上人言とてと二十一年又  
 不軽とつらと十六万七千六百七十八年必矣と云  
 乃らとや

- 花日蔭系をむさぐりごけとも云系母を法ひくく  
 四うげ系母をむさぐり  
 ○松雪山童子といひし阿史文兼又記四句ノ文ヲ承ム  
 鬼を帝尺天と 涅槃經  
 ○細ちるひつらとのりそよぬぬをよみとの秋を耳到はん



祓禊の物終まり作け物終今の世み足之代

○中の美産の附葉より基年の後ろと送り 細基の

○ぬびく 細点心の節舎の附も有之 惺化といひ

花粉 糝をみ穀をみあみうごりて粉やと候は

ゆで 甘葛とくけてこね合せテ細キ竹の筒とて

申にうくとし入と云

○苑在位の天子由女と後下は配ひるを稀之嵯峨皇女潔

姫の卵を送るごれこと葉を天子の女と要ル

○不怪く

○花近生の花又十日といふと云百日とりしと云 そ白

佛式を候と候は

○わくく 細女く志く

○限の揚器 細盤のよきと云物之 盃式と薬器ノ盃之

四方の膳をどのよと昨一祝ゆらと朱墨と白木

と楊栗とつり今之至位記あり

○さくく 花玉をと粉の味を土器とりてつる

酒と梅入て春をそつらと方とこしとて天を

とを懐中を候

○葉取さつづき候と云と云のたふこはつひめては

さくときと云 ことと云と不詳也

○おらや 細おらやの物と云 葉 おらあといふ

さくときと云といふあり

○美苗文 花より葉のよこしと云るたの衣のよこ

又美鶏冠本の糸と云といふ布も同様



東屋 宇治六 薫火の集の八月九日とあり

立四阿アサヤ四方のあまのりのおつちやうにあらるる

。法くん山 抄と伝

。中おろ君浮船と伝して二条院に中君の御令並  
浮船西ノ底ノ北ニ移ル自交式日爰ニ来レ折帝中ノ君  
浴湯スル内ニ此時浮船と見付テ押テ對面付内中宮  
御胸痛由告母れ自交立出のくを夜更長をる  
中おろ君とて傍り浮船と又誘引由て系を断る  
之系の色と云々九月十三日薫火ノ尾と傳へて二条ノ  
家内を薫火せしむるに浮船ニ逢夫方同車して宇治ノ  
竹住タケヅミニ薫火此ニ二三石返る

。あづはまてやうらもまう人のあまをぶてしと物といはれ拾  
。庚申 一と云々申ノ字濁ル

。あてひてもかりしと云々 是あてひあてやうらと云々 味

あてひてもありしと云々 是あてひあてやうらと云々

。常陸守ウ如と伝をおおの極ひく傳と傳人巧言令色誇

譽虚誕云々 傳と傳と云々 是あてひあてやうらと云々

。こてあつた 細のあつた之勅定之世俗と云々 是あてひあてやうらと云々

同例之傳母のちこてと云々 是あてひあてやうらと云々

。贖シヅメ勞 細と出ス之贖銅と律ニ一尺是之 一宮ニ贖之

白氏白氏 人非ニ木石ニ皆有情 不如不不逢傾城色ニ

。脚タラシと足タラシを人 細おとんん之物と下の附の字清テ

。薫カの香カ者カニシテ薫火品カ 是あてひあてやうらと云々

と伝すのれハ即愈と云々 牛乳のともぬ之をよみ梅檀

ハ事ゆき

。走ぬぐし十月廿あつたぬと云々 三 西又九月と云々

○つがせんさみ 三坪とせびきさぬこ

○浮船ニ乗院 善白宮ニん舟くると一坐の不幸之終身之徒  
ナセリ是世より不幸の人をうくるんをいふ也却と悪者也  
天命のいれしきこととあり

○屏風のゆくりよけれあつち 孟 背を鏡に入らぬ  
とぞと人よて 咲 おそろしき

○降魔相 紫 少相成道の内へ 忿怒の相とあり

○長谷寺の利生 玉鬘と成徳 浮船と成徳

○うけしき 細物之鞍とありき 紫うけしきを鞍の扱はぬ  
垂行難し

○いづちの侍らん 細狐疑同心心 いづちのゆびげなどあり  
鼓心のありぬ

○倅賀部女 細玉と三毛と とう巻とを狐の尻を家のつち  
媒と云之媒の物とつちを狐の人と扱スカと 專今俗  
呼老女と為 專 漢語抄 土佐日記よわらうのうらうら不  
物修ふるあつとつちあり

○孟牛飼應神 天皇の御所分始ん

○あど やうとらむ 中納言家持と云ふ

○薰具 浮船 宇治へ行所と云ふ 不祥の事なり

○浮船 宇治七 薰香を載の 西月分三月末とあり

○浮船 宇治 卯提等ヲ中忌ニなれけ文ヲ入テ白文浮  
船のちあつた 堤茶 白文 浮船ヲあて不心

○卯提 卯提と同一と云

○叔楸 叔楸ノ枝ヲ云



娘びを振るべし浮船を戒テ万一自こふあゝと生テ  
んざんと勘あす是意ありて浮船狼狽頭腹  
力と控人と勢と自の使意の使字依こり遊フ  
兼而移力さうしとこの語同くを偽りいふ所を  
怪しともしる童と自の使と依けて事とんせしむ  
兼浮船の自に通ひくを知り程此段とあつて浮船  
文とをえ浮船恥くを遊使依捨力侍長と衣  
を二丈二尺の女の悪強と物終と浮船之テ活心定ル  
自字依一付付財兼の内令人水作テ浮船と望ク  
護に故二自射面をくして解ル

○万葉十六巻と柳下ハ縹児之又本末終ととこの城の事  
畧後と加ナリ是も万葉三二より本末終二津の玉の女  
尊原氏の男と本末の智奴氏の男をひて志保女方と  
と云く

女思ひて生田の所男と柳死ス騎男二人七芸

人を女のもとしと一人を足と云はれ是とこの城とつて  
川邊と云ととこの城とつて云はれ是と云はれ是と云はれ  
此九ニ卷原知女の真城と云り万葉分十六様子  
と云女と二人男挑きてうづひつらに女教とて女が  
死して相害と云と水くやめんと云と云と云と云と  
林中に経死ス二人ノ男悲テ奇なりと云万葉分十六  
こと云女男二人うづひつらに女倦て耳をの比と云と柳死  
二人の男奇なりと云と云

- 髪編方ういてと云云信長と柳と柳髪と根のわりり
- 浮船の母不祥ノ夢ヲ入て駭をて文ヲ浮船ニ呈ス
- 心ざりし 細むるさつぎの山と云
- 所 亦の枝よ付とと枝垂を頼と云

○思ひあまり出あり玉のあまらん夜深く見をむじぶさ

蜻蛉カゲロウ 宇治ハ 浮船力と御てをまはりのこと兼書云

りげらふのよめを喜白とよめを陽燄之玉又兼どげ  
ろやとまはりのあつとを花をるを虫のくまり

浮船四月新来りし侍長石を寄るを機と知り

所宇治川と力と御ルト知り衣裳等と車載て焼

蕪 白と及浮船とてんてりてあつて迷ひと死ニタル

宇治御不例侍とて悲不可云

○細云浮船松舟終とのせよんくねとのせや

○いあめのりしき 三白の涙うちうるさゆと

○浮船の先葉の男或アコ文蕪スうく兼白等舟の

思ひも折ぬけ軽浪りも出ぬねと後とあつて浮船の

作りは後殊緒にたまの祿災之 孟宇治言はあつて兼書アウ

粉骨の片一より

○兼天おろす乃の方より一糸のまとらんく 女ニ宮 心ま

○兼く

○芹川の大舟 細け舟終とのせよみ侍りて

○陽燄を多陽の氣の煙のやうにらんゆると云

○はたしてもそうまよとのらうけりあつてあつてあつて

○子智 宇治九 兼書云七葉のう浮船終ておまの

とらり浮船山也ありてより子智の君と云

○こしけさりし 花金峯山ノ精進一服さゆと程と云

○横川僧於母尼付妹僧尼ノ妹 長谷福の飯にサコ宇治ノ  
院ニ宿之兼に樹下ニ変化る 在ウ芳尼をまむ女と云る

よみひろくうりておそるんぬると云是物と云はるそめは

。ぬりぬぎの地やまをまの毛之へキトナリ

。ら文珠樓の目鬼の年朱の盤と云は後物終にあり

舊記ニ目鬼ト号ス

。妹尼曾テ女ニシラレ悲之ニと夜泊ぬる女のうりまをを

足しぬ浮船と憐を養生し少地はつ色解凡四日月ノ

石を浮舟悩えてマ非悦むタリ

。昨護テうを必又穀芥子ると焼之邪氣ニくまら

。ううわいを 中をそわひ之客面と云之戒行の深き人

受人ニ生ル之响魚上人の受人ハ足夜とのうり

。端正者、忍辱、中、来、大集經、面目、悉、端嚴、為人所

喜見 法華隨喜功德品

。佛種從緣起 法苑珠

。五戒八一十一等ハ麤強之 二百五十一五百ト菩

薩三聚戒十无盡一切威儀ハ細穩タルベキ

。紺青鬼惱ニ染殿后ヲ為ニ智證カ所詰、耻タル色アリテモ

ニ存母ありうり度のやうに成て清 居相云犯モ足

。僧於浮船と如おし々色を具出テ云有せよ怨ヲ止

タル僧ノ魂飄泊ニケルカ此字法ニ美女アマタルニ住ニ付

ケルカ浮ノ虚ニ入テ取リシナリ然レ氏佛陀ノ夕メニ負テ今

去ルト云 浮船復ス則語テ曰先ニ吾欲ニ拙身ヲ棄テ

ハナチテ出タリニ風烈ク吹速ヒ川波アラカニ響テ独リ恐

シクスノコノ端ニ足シサシコシナガラ如何トスベキコトヲ不知心神

恍トメ甚迷惑スル知ニ羨ナル一男来リイサタマヘシノガモ

トトイヒテ懐心地ノセシシ句又ノ玉フト覺ヘシ程ヨリ心

地迷フ而シラヌ処ニスヘ置テ此男ハ消失又是ヨリ不覺ト云

- 妹尼ノ女古聲ノ中將小地一幸り葦の隙方も智ノ志也
- 尼志志慕し下後くまをさしも智尼終に難面ニ
- も智尼終に佛教と彩と出スカス
- どうるに細姫の字之 老女の稱之
- も智尼 基所りし女の尼も智基と仰りて云佛教
- 基所り下基聖大徳ナリニ然し尼も智云ハ佛ありん云
- 大智佛に備系極極良利と紀系の玉若津郡ノ大村の人
- 好真蓮と名づく基聖と云ト云 抱扑子曰圓ハ基者
- 世ニ謂フ之ハ基聖ト
- いちちとうと云云 妹尼云ノも智云と申ん怪くんん神
- 細雨にげと云ハも智云 ち梅ハニ昏影ハ龍ノ雨にけさす云云
- 細雨園妾顔色如ハ花命如ハ葉ノ 君恩の存キハたとふ
- うととびつろ 三つととびつろ

- 菖蒲草之ハ梅子多と大畧同トすつらうさうさ入て傑し
- 孟嘗ニくまをけけりこころもを来づらふ大智と云
- 中おねと云けりお登ハやうお曹と云らん

夢浮橋

字法十 一名法の師 兼サ七筆も智の生

末日月進とあり

- 此題号を詞及弁の心と云ふ 余ノ巻ト異ナリ
- 浮橋天ノハのふこれと浮橋と生死ノ終り煩惱ノ根元之
- 爰とをせ名出世の法皆如幻如爰こといふ也
- 小とを光源氏御終と云ふがとく或を多浮橋御終
- ともしつらゆと云 兼の移とサセ帳ニはと云ふも同
- 城のサセ名の光と云ひらと云ふら也
- 定家ノ春の春の春の春の浮橋とだ一その弁も同也
- 涅槃經ニ生死无常猶如昨夢

○大田覺經曰始テ知ル衆生本來成佛生死涅槃猶如

昨夢

○小井口 ち原の村

○業師 狂ニ業病 鬼病 四大病アリ 四大ハ 水 火 風 ヨリ 起ル 凡 寒 暑 湿 ナリ

○ひさがし 相海 弟 たる

○是 ニヤカ 白氏文集 ○驚破 ヤ 童ヲ尼ホルサマナリ

○終ノ詞 ハ 終 垂 死 威 重 之 何 ナリ おろしきとありしをいひしを

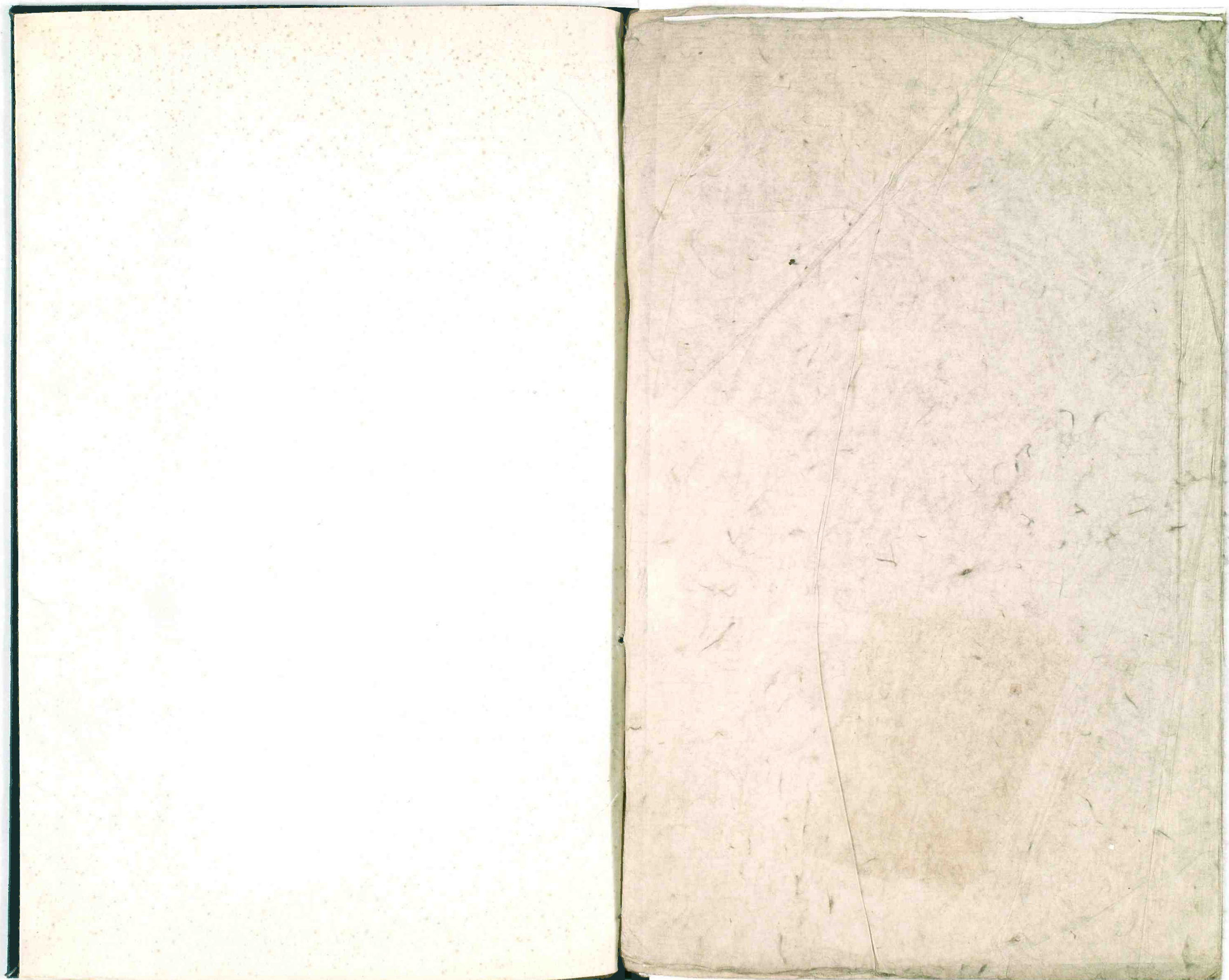
○中ニ 信下 下 有 け 詞 と 讀 了 け ち 有 ち 是 下 二 一 部 の と あり け ち あり

○多智の世ニ 蕙 秋 好 木 宮 の 詞 あり 多智 志 と あり 世 世 蕙 橋 川 へ 行 傍 船 逢 て 祥 二 浮 舟 の 事 と あり 世 世 是 あり

○世ニ 少 神 人 行 久 人 傍 船 案 由 一 ち あり 世 世 是 あり 世 世 傍 船 障 有 け 不 行 加 蕙 飯 京 二 又 ノ 日 浮 船 の 事 童 シ 二 傍 船 二 行 一 文 と あり 世 又 蕙 の 文 と あり 少 神 人 世 世 二 多 智 娘 是 童 二 隔 元 逢 而 蕙 一 の 事 あり

元禄十三年 辰 九月廿五夜 於 灯 下 字 終





愛 知 県



1103280350